個性『固めて転がして』

ドンファン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーローが好きで　人々が好きで　世界が好きで
その全てから否定される個性

創作自体が初です、温かい目で見守ってチラ見して頂けると幸いです。

拙い感じではありますがのんびり頑張っていこうと思います。

目次

No.0 …… 1
No.1 …… 9
No.2 …… 14
No.3 …… 34
No.4 …… 44
No.5 …… 59
No.6 …… 71
No.7 …… 85
No.8 …… 106

Ｎｏ．０

”個性”

その始まりは一世紀も昔、中国に現れた発光する赤子からだと言う。

超常黎明期の社会は個性を理解せず病気や迫害の対象としていた。

本人の意思とは関係なく個性が発露してしまったが故に、他者を自身をも傷つける者も少なからず居たからだ。

異形化する個性はその見た目から迫害され、危険でもなく見た目も変わらない個性の持ち主は社会に溶け込もうとその個性を隠し通す。

個性がバレたら社会的に抹殺されてしまうかも知れない恐怖…窮屈で、相互監視社会と言っても過言ではなかった。

何故こんな力を得てしまったのかと個性を持つ人々は苦悩するが答えは出ない。

それから数年、数十年と経ち、社会はその超常との有り様を変えていった。

科学の発展は停滞し、超常の解明にあらゆるリソースが割かれた。

少しづつ理解され、その個性という力は格差や嫉妬や妬みを呼び、傍若無人に振る舞う者も出始めた。

個性を使い社会を混乱に陥れる者、そしてその個性から人々を守る者。

人々を守る者はヒーローと呼ばれる職業に分類され、それに伴う社会制度、個性に関わる法改正。

個性を自己満足の為に振る舞う者は敵（ヴィラン）と呼ばれ、取り締まられる。

しかし中には敵ではなくとも偶然にも個性発露と同時に暴走してしまい周囲に被害が及ぶケースが稀にある。

個性は四歳児で発現すると言われ、その年頃の子供は個性に振り回される事も珍しくない。

その力で両親が育てきれないと子供を捨てる、親が亡くなる等で家や行き場を無くす幼子への救いの手として創設された個性社会の

セーフティネット。

”個性児童福祉施設”

孤児となった子供の心身の健やかな成長を支える為に、平穏で笑顔溢れる生活を心掛ける。

「今日は冬にしては暖かい陽気だ、午後からは外に連れ出してもいいかも知れないな」

施設の職員である頑名（かたくな）・強（つよし）が換気の為に廊下の窓を開けながら声を零す、ふと庭を見やると誰かが居るようだ。

これから昼食だと言うのに、一人ボールで遊んでいる少年が居る。

青色の球体に黄色の半球がいくつもついた歪なボールだ。

それを器用にリフティングしたり施設を囲う塀にぶつけて跳ね返ってきたのをキャッチしている。

「王子（プリンス）くんまた個性を使って…駄目だと教えたんだけどなあ」

ちゃんといい聞かせないとな、そう呟きながら彼の事を考える。

（星野（ほしの）・王子（プリンス））

性格は活発で明るく、ここに移されてまだ少ししか経っていないが我々職員にもよく話しかけてきてくれて人懐っこさを感じる。

髪色は明るめの緑でウェーブのかかった癖っ毛をしている。

自身の髪色故か好きな色も緑のようだ、緑色でフードのついた服を好んで着ている事が多い、今日は暖かい方だが赤いマフラーもつけてる。

いつも外で遊んでいる、身体を動かすのが好きで座学はどうも苦手のようだ。

個性は”くっつくボール”と提出された書類にはあったが、自分にはくっつかないようだ。

よく他の子の私物をくっつけてしまい、そのせいだろうか？他の子から距離を置かれている。

彼の性格から自分からよく話しかけてはいるが…どうも避けられ

ているようだ。
　みんなと交流出来るようなレクリエーションを何度か催したが、どうも上手くいかない。
　無理に大人が介入するとそれが原因で余計に孤立してしまう事になりかねない、歯がゆいが様子を見ているしか出来ない。

「そろそろお昼ごはんだよー！戻っておいでー！」
　そう頑名が声をかけるとこちらを向き手を振ってくれた、しかしこちらに向かわず庭に散乱している他の子達が使っていたであろう遊具へ向かって行った。
　どうやら片付けてくれるようだ、出しっぱなしで戻ってきた子達に一言かけねばならないな、と軽くため息を吐いた。
　既にみんな集まっているだろう、午後からの予定を考えながら食堂へと向かう。

「先生、ドクター、こちらになります」
　その声は突然聞こえた。
　黒いもやが空間に現れたと見えるやいなや大きく広がった。
　そして中から車椅子に座り仕立ての良い背広を着込んだ特徴的な黒く大きな仮面を被った男と、頭髪は無いが豊かな髭を蓄えた初老に見える小太りの白衣姿が現れる。
　そして大きく広がっていた黒いもやが人の形に収縮していく、余りに異質なものの登場に同室に居た職員や子供たちは動揺を隠せない。

「みんな集まってるいいタイミングだね、ふむ?庭に一人居るみたいだ。黒霧、連れてきてくれないか」
先生と呼ばれた車椅子の男が黒いもや、黒霧へ声をかける。
「何者ですかあなた達は!ここは児童福祉施設です。許可なく勝手に入ってはいけません!」
自分がもっとも適していると考え前に出て声をあげる頑名、怯える子供たちを守るように立つ。
自分の個性であれば物理的な物事は大抵何とかなる、そう自負していた。
「アポイントメントも取らずに申し訳ない、僕は君たちに用事があってきたんだ」
車椅子の男が悪びれもせずに対面してる職員に問い質す。
「聞けば何でもここは個性事故を起こした子供たちの保護施設なんだって?気になるなぁ君たちの”個性”」
言うが早いか車椅子から煙のようなものが噴き出す、白衣の男はいつの間にかマスクを着用していた。
「これはガスか!?一体何をする気だ!」
突然振りまかれた煙に頑名は衣服で口元を押さえるがその程度では効果はなかったようだ。
「眠っていてもらうだけじゃ、もっとも目覚めるかは保証出来んが」
白衣の男がマスク越しに言い放つその言葉に慄いた。

立っていられなくなる頑名、後ろに匿ってる子供たちや同僚に視線をやると既に横たわっていた。
せめて通報を、そう思い取り出した端末だが既に力が入らず手からこぼれてしまう。
「敵め…」
端末が床に落ちると同時に意識を手放した。

◇◇◇

「この職員はショック吸収と面白い個性だ、個性事故を起こしてしまった子供達を相手するのにはうってつけだったんだろうね」
「それはええのう、その手の耐久個性を掛け合わせれば彼奴の拳でも砕けん身体を造れるわい」
　そう言いながらテキパキと寝ている人を精査していく。
「そうじゃ、そのマスクの塩梅はどうかね？何か希望があるならば改良していくつもりだが」
「少し重いかな？ずっとつけていると肩が凝ってしまうよ」
　冗談まじりに感想を言う仮面の男、それを聞いて笑う。
「膂力増強の個性があるのに何を仰るやら…しかしユーザーの声はしっかり反映させんとな」
　そうこう言いながら物色している2人だったが、黒霧が未だに戻っていない事に違和感を覚える。
「黒霧が捕まえられない個性の持ち主だったのかな？見に行ってくるかな」
　おもむろに車椅子から立ち上がり歩きだす、その姿にドクターは些か眉をひそめる。
「確かにある程度回復はしてはおるが…あまり無理はしてほしくないのう」
「これもリハビリの一環さ、ドクターは撤収の準備を頼むよ」
　そう言葉を残し黒霧の元に向かう、施設はさほど複雑ではなくすぐに庭まで出てこられた。

「これは…何とも面白い個性だ」
　庭に出て一番最初に目に映ったのは不思議なオブジェであった。
　プラスチックで出来たスコップやバケツ、三輪車やゴムボール等の遊具…それだけではない自転車やカラーコーン等々、庭にあったであろう物が不自然にひとかたまりになっている。
　その塊の側面に黒霧が個性を発動したままの姿でくっついている。

彼の個性は”ワープゲート”その身体を覆う黒い霧を使い、あらゆる物や人を移送する事が出来る筈だが、彼は為す術なく塊にくっついており動く事が出来なくなっている。
「先生危険です！こちらには近づかない様お願いします！」
黒霧は現れた人物ＡＦＯ（オールフォーワン）に気がつき、声を掛ける。
「黒霧　君が捕まえられないどころか捕まってるとはね　思いもしなかったよ」
ＡＦＯは黒霧でさえ捕まってしまう個性をみて、仮面の中で笑みをこぼした。
「…面目次第もありません。子供一人を連れてくる事が出来ずに申し訳ございません」
顔まで霧で覆っているので表情は見えないが悔恨の念にさいなまれているのだろう。
「いいんだよ黒霧、こんな個性を持つ者に会う為に来たんだ」
そう言いながらオブジェに近づき観察する。
「正直、室内に居るのは素材ぐらいにしか使えないのばっかりでね。わざわざ僕が外出する程でなくてがっかりしてた所なんだ」
オブジェの側で座ってる子供に話しかける、疲れているのかこちらに気がついていないようだ。
「いやあ楽しい個性だね君、名前はなんて言うんだい？」
「おじさん誰ー？カッコイイ仮面だ、ヒーロー？」
臆面もなく質問を質問で返してくる。
「僕はヒーローではないよ、僕はＡＦＯ。そこに居る…くっついてる人と一緒にここに来たんだ」
目線を合わすようにしゃがみ、黒霧を指差す。
「彼を離してあげてくれないかな？」
「お客さんだったの？ごめんなさい、一緒に遊んでくれるのかと思って固めちゃった」
「僕の名前は星野王子！ここに引っ越してきたばっかなんだ」
立ち上がってズボンをパタパタと叩きながら自己紹介をしてくる、そしておもむろに塊に手をおき…それは崩れ始めた。

不自然に固まっていた物が重力に引かれ落下してくる。
黒霧は上から落ちてくる物を個性で遠くに飛ばしながら体勢を立て直す。
「ありがとうございます先生…まさか私の個性が効かないとは」
黒霧は王子からすぐさま距離を取る、目を離したつもりはないがいつの間にかボールを抱えていた、球体に小さい半球がいくつもついた歪なボールだ。
「それが君の個性かい？良かったら僕に見せてくれないかな？」
ＡＦＯが王子に向かって手を差し出し、有無を言わさず彼の個性を奪う。
黒霧の言葉を聞いてＡＦＯに向き直る。
「先生？新しい先生なの？いいよーどうぞ」
既に自分の物ではないボールを差し出す。
そしてＡＦＯはその個性を理解する、あたかも元から自分の物であるかのように。
「なるほど、これは凄い…凄いが僕じゃ使いこなせないし脳無でも駄目だな」
そう呟き、王子を見やる。
まだまだ年若く、教育していけば彼もまた敵として死柄木弔の助力になってくれそうだな。
そう思いながら王子を眺めていると向こうから声をかけてきた。
「先生ボール見ただけで分かるの？先生凄いんだねー！どう僕の個性？」
自分の個性がどれ程のものか知ってか知らずか、ニコニコと笑顔を向けてくる。
「ああ、とても良い個性だね。実はそんな君に特別な授業があるんだ」
話しかけながら個性を返すと共にボールを渡す。
「授業？お勉強は嫌いだなー」
「勉強と言っても難しいものじゃないよ、君の個性を伸ばしてあげる特別な勉強さ」
その言葉を聞いた王子はよく分からないと言いたげな顔になる。

「引っ越したばかりと言っていたけどここは狭くないかい？君の個性を伸ばすにはもっと広々とした場所が必要なんだ」
「場所だけじゃない、色んな物を知る事が大事さ」
そう言って近くに落ちていたバケツを彼の手に持つボールにくっつける。
「君の個性は実は何でもくっつく訳じゃない　君が欲しい物や憧れてる物しかくっつかない」
それを聞いた王子は驚いて目を丸くする、目の前の先生は個性の先生なんだ、と。
今まで会った大人達は個性を使ってはいけない、危険だから駄目としか言ってくれなかったのに。
「王子、君はどうしたい？君の作る塊を大きくしたいと思わないかい？」
「うん！大きくしたい！ずっと夢だった事があるんだ！いつからか覚えてないけどやりたい事がある！」
興奮を抑えきれない様子で声を大きくする。
「僕の作った塊を大きなお星さまにしたいんだ！」

Ｎｏ．１

「やっと帰ってきたか黒霧…なんだそいつは？」
黒霧の個性に誘われ、王子が着いた先は薄暗いＢＡＲであった。
カウンターの片隅で座っていた人物から声を掛けられた、上下共にリラックス出来る服装ではあるが顔に張り付いた左手が明らかに異質である。
いつから飲んでいたのか分からないが床には空き瓶がいくつも転がっていた。
「死柄木弔、飲むなとは言いませんが散らかすのはいただけませんよ」
ため息混じりに着ていたコートを壁にかけ、カウンターの内側に入り片付けを始める。
「で？このガキはなんだよ？俺がガキが嫌いなの知ってて連れてきたのか？」
ボサボサの髪と手の隙間から鋭い視線を飛ばす弔、それを物怖じせずに見つめ返す王子。
「始めましてー！僕は星野王子！先生が僕の個性伸ばしてくれるって言うからついてきたんだ」
自分の自己紹介が終わって相手の名前を聞こうとするも弔はそれを無視する。
「先生が？本当かよ黒霧、なんでこんなガキが先生と会ってんだよ」
「ねー！そっちの番だよ、名前なんて言うのさー」
話を聞かない弔に苛立ちを感じ、王子は個性であるボールを虚空から生み出す。
後ろからぶつけてやろうか、と思っていたら弔の座ってる側に設置されたモニターが起動する。
「僕の方から会いに行ったからだよ弔。王子もそのボールを下ろしなさい」
モニターに映るＡＦＯ、その言葉に反応し後ろを向く弔、慌ててボールを背後に隠す。
「そのボールが個性か？それで何しようってんだガキが」

「さっきからガキガキって！自己紹介したんだから名前で呼んでよ」
むくれた顔になる王子、だがそれを見て薄ら笑いを浮かべる。
「お前みたいのはガキで十分だ、で？わざわざ連れて来なくても奪ってしまえば良かったんじゃ？」
モニターに向きなおり問い質す弔、背後で王子がいじけてボールで遊び始めるが気にもとめない。
「彼の個性はなかなかユニークでね、僕らがどうこう出来るものじゃなかった。それでも彼の力は君の役に立つ筈だよ弔」
先生にそこまで言わせるとは…横目で見てみると黒霧が慌てて王子を追いかけている、室内で遊びだすとはこれだからガキは嫌い―

不思議な光景が弔の目に映った。
床に散乱していた筈のいくつかの瓶がひとかたまりになって転がっている。
王子がそのボールを転がす度に床に落ちていた他の瓶や掃除用の出したバケツ、それも水が張られた状態なのに溢れる事もなく一緒に転がりだした。
「どーゆー事だ？バケツに水が入ってるよな？個性だとしても重力無視してないか？」
「よく見ているね弔。彼の個性は物理法則や質量保存、摩擦係数も無視してるんじゃないかな」
それだけじゃないんだ、そう言葉を続けるＡＦＯ。
「あの個性は彼の望むがままにくっつき固まる。それは指数関数的に成長し、人を、家を、街をも巻き込み転がる災害となる筈だよ」
「彼の個性…名付けるとするならば”核（コア）”」
「僕の名前よりよっぽどオール（全）・フォー（て）・ワン（を一つに）だよ、物理的にね」
「しかし先生まだガキだぜ…使い物になるのか？」
上機嫌に笑っているＡＦＯに弔が尋ねる、今も黒霧との鬼ごっこを楽しむかの様に狭い室内を跳ね回ってる王子を見て、とてもじゃないがアレと一緒には居たくないと思ってしまう。
「そこは勉強してもらうさ、黒霧にも彼のお守りをお願いしたしね」

「先生がそう判断したのなら…」
明らかに不満を込めた声でそう返事をする弔、未開封の酒瓶を手当り次第に飲み始める。
「上手く彼を使ってみせておくれ死柄木弔。君が恐怖の象徴と呼ばれる為には様々な事を経験し、学ばないといけない」
モニターの電源が落ちる、暗くなった画面に反射し背後で黒霧が王子を羽交い締めにして騒動が収まった様子が映る。
「はぁ…クソゲーをやらされるのかよ」

◇◇◇

王子と出会ってから数ヶ月…寒さも和らぎ、春になろうとしていた。
「黒霧?あのガキも居ないな…また社会勉強か」
のそりと部屋から現れる弔、時間は既に正午を回り空腹を訴えている自分の腹を恨みがましく抑え込むが収まる気配はない。
気まぐれにテレビをつけたがこれが間違いだった。
巨大な女ヒーローがまたもやらかした、空を飛ぶ今話題のヒーローを見掛ける事が出来るスポット特集、チャンネルを切り替えてもヒーロー、ヒーロー、ヒーロー…

死柄木弔は鬱屈とした気分でいつものやり取りを思い出してしまった。
あのガキは自分が敵であると自覚してないのか、何かとヒーロー番組ばかり見ている。
テレビを消せと言っても聞かず何度口論した事か、そうしていると黒霧が彼の個性に関わる事ですから、とやんわりと取り成す…これがいつもの流れだった。
それだけではない、日々を自堕落に過ごしていると何かとガキが

ギャンギャン喚いてくる。
「そんなにぐーたらしてたら輝けないよ弔！必要なのは自然を愛する心、バランスのとれた食生活、十分な睡眠時間、日に焼け―」
「煩いぞガキ、自分で何言ってるか分かってるのか？何が自然を愛する心だ」

バーで飲んでいるといつも絡んできて非常に鬱陶しい存在…それが王子への印象だった。
「…煩いのが居ないんだ、酒でも飲むか」
言うが早いか酒瓶を手に取り、カウンターに取り残されていたグラスに注ぐ。
ツーフィンガーを超え、なみなみと注がれ―
「死柄木弔、飲むなとは言いませんが飲み方と言うものがあります」
いつの間にか黒霧が新聞を片手に戻ってきていた、あのガキも一緒だ。
「好きに飲ませろ飯も食ってないんだ」
「なおさらですよ弔、簡単な食べ物を用意しますので…今朝の新聞です。これでも読んでいて下さい」
新聞を受け取りながら舌打ちをする、急に帰ってきては小煩い事だ。
煩いといえば、いつもなら声を出す前から煩いガキが妙に大人しい…いつの間にか床に転がって寝ている。
「個性の使いすぎで…いえ、普通に体力切れですか。ずっと走り回っていましたからね南極で」
「はあ？南極？何でそんな所に行ってるんだ」
呆れ顔で王子を見る、言われてみればもう外は暖かいと言うのに大層な厚着だ。
「何でもペンギンを見てみたいとかで。今朝の実地は急遽大移動となりましたよ…まあ見るだけでなくペンギンのコロニーを固めて転がしてましたけどね」
何してるんだこのガキは、弔は満足そうに寝てるガキを軽く蹴っ飛

ばす。
「出来ましたよ。先に少しでも食べておいて下さい」
そう言ってクラッカーにサラミやチーズを載せたものとピクルスを添えた皿を差し出した。
「…ピクルスはいらない」
そう言って新聞を読み始める、その姿に黒霧は軽く溜息を漏らす。

「見たかコレ？教師だってさ…」
カウンター越しでグラスを磨いてる黒霧に向かって呟く。
手に持った新聞を置き、振り返る。
そこには全身を黒い肌で覆い、むき出しの脳と乱杭歯の巨躯が部屋の隅で佇み焦点の合わない瞳で弔を見ている。
「ガキなんていらない…この脳無さえいれば十分だろ」
未だに床で寝転がってる王子を冷めた目で見ながら語る。
「なァどうなると思う？平和の象徴が……敵に殺されたら」

No. 2

「おかえりなさーい！何処行ってたの二人とも？」
　髪や髭から炎を噴き出すヒーローの活躍を映したテレビを見ている王子、黒霧の姿が見えてすぐにそちらに振り向く。
「何処でもいいだろ、ガキだって黒霧におねだりして勝手に何処にでも行ってるじゃねーか」
　霧から姿を現しながら反論する弔、珍しく身体の何処にも彼のトレードマークとも言える手を付けておらず、普段なら顔には必ずつけている手でさえ外してラフな格好だった。
　その素顔には、またヒーロー番組を見ていたのかと怒りに染まっていた。
　お世辞にも健康そうとは言えず、唇はひび割れ、目が落ち窪んではいるが血走っている。
「個性の勉強の時は黒霧さんにお願いしてもいいよって先生が言ってたもんね」
　べーっと舌を出して弔を挑発する。
「弔は勉強してるの？いつも部屋でゲームばかりしてお外にも出てないじゃない」
「あァ!?何だったらテメェの身体で個性のお勉強とやらをやってもいいんだぞガキが」
　弔が口角泡を飛ばしながら王子に詰め寄ろうとするが、人の形に収束した黒霧が取り成す。
「落ち着いて下さい死柄木弔。まずは持ち帰った情報を精査する方が先なのでは？」
「そうだ、ガキと遊んでる時間はない。マスコミを使った陽動は上手くいったし才能あるな俺は」
　機嫌をなおし黒霧からブリーフケースを奪い取り、中にある書類を取り出し読み始める。
　その姿を見て黒霧は一息吐き、王子に向き直る。
「星野王子、貴方はもう少し慎みというものを学ばないといけません」

まだ習っていない言葉に首を傾げる王子。
「相手に向かって舌を出したりしてはいけません。と言う事です」
「はーい黒霧さん」
先生やドクターから教育を任され、ここ数ヶ月は本当に溜息をつく機会が増えてしまった。
死柄木弔と星野王子、何故この二人は反りが合わないのだろうか…顔を突き合わせれば言い合いが始まりずっと気を揉んでいる。
「それで何処行ってたの？お土産とかある？」
「お土産はありませんよ王子。我々が成すべき事の為に雄英高校へ潜入していたのです」
「何を勝手にベラベラ喋ってるんだ黒霧」
書類を読み終えた弔が黒霧に向かって叱咤する。
「まさかこのガキを使うつもりなのか？喧しいだけで邪魔になるのは目に見えてるだろ」
「しかし彼の個性は一対多を為せる力があり、上手くいけばオールマイトすらも―」
「だとしてもだ。こんなガキの力を借りるのか？俺の脳無さえ居れば…対平和の象徴さえ居ればなんとでもなる」
静かに怒りを顕にする弔、話が見えず置いてきぼりな王子を指差して続ける。
「毎日毎日…今だってヒーローが出ているテレビを見て、これでヒーローが目の前に居たらサインでもせがみ立てに行きそうなもんだろ」
「えー？サインいらないよ。ヒーローが居るのなら本人が欲しいな、固めて星にして飾りたい」
その発言に二人は王子を見やる、同時に向いた視線に首を傾げる。
「だってサインより本人のがレアだし、オールマイトのサインなんて何処でも売ってるよ」
「でもエンデヴァーのサインだったらレアかも？でも本人のが欲しいよなー」

少しの間置いて弔が腹をよじって笑い出す、黒霧は王子の発言をよく飲み込めていないようだ。
「ははははっ！自分で何を言ってるか分かってるのか？少し前にも自然がどうこうとか意味の分からない事を言っていたが、頭がおかしいのかお前は」
やっと笑いも収まり、思考を深めていく。
「はー…殺すじゃなくて飾るか、悪くないな」
雄英高校に出掛ける前、先生からオールマイトは弱体化していると連絡があった。
にやりと不敵な笑みを浮かべ、先程見ていた書類に書かれていたカリキュラムを思い出す。
「弱って動けないオールマイトの前に生徒の首を並べたらどんな反応するだろうな」
いかなる時でもスマイルを崩さないオールマイトがどんな表情をするか弔は知りたかった。
平和の象徴を物理的に精神的にも圧し折る事が出来れば、このヒーロー飽和社会はもっとマシになろうだろう、と。
「黒霧、頭数を揃える必要がある…チンピラ共を呼ぶぞ」

◇◇◇

それから数日後、死柄木弔の呼びかけによって郊外にある廃工場の中に様々な敵が集められた。
異形化の個性か巨大な身体を持つ者、その身体自体が武具や銃器になっている者、各々の個性に応じた得物を持つ者。
姿や思想は違うが彼らの待ち人はただ一人、その時を待つ。
幾重にも重なったパレットの上に黒い影が広がり、全身の至る所に手を身に着けた死柄木弔が彼らの前に姿を現す、その隣に脳無の姿も見て取れる。
「ついに決行の時だ。我々敵連合が平和の象徴を殺し、この社会を打

ち砕く時だ」
「お前達には露払いをして貰いたい、オールマイトを殺すのは俺たち…三人がやる」
　弔が周りを見渡し雄々しく宣言をする、その姿にチンピラ達が思わずといった様子で歓声を上げる。
「お前達を個性に適した場所へと送る。ＵＳＪと言って様々な状況…火災水害等の事故現場と山岳や家屋が倒壊したものが設備としてある巨大なドームだ」
「そこに雄英の生徒達を送り込む、お前達はそこで待ち受け生徒を始末し中央にある噴水まで持ってこい。お前らの個性はこっちで把握している、指示通りに行動しろ」
　弔が口早に説明する、チンピラ達がざわめきだし緩慢に動き出す。
「無駄口は叩かず段取り良く動け、お前達はもう路地裏に打ち捨てられていたチンピラじゃない、敵連合に所属した敵（ヴィラン）だ。俺達で平和の象徴をぶっ殺すんだ」
　弔がチンピラ達を鼓舞する、その言葉に意気込む者、武者震いを起こす者、元々つるんでいた者同士だったのか小声で話し出す者もいる。

「あまり煽っては焦れ込みすぎる者が出ます、この辺りで」
　そう耳打ちしてくる黒霧。
「どうせ有象無象だ、腰が引けて逃げるよりは功を焦って自爆でも何でもしてもらった方が良い」
　隣に居る脳無を横目にチンピラ共への辛辣な評価を口にする。
「それよりもあのガキはなんで居ないんだ？さっき四人って言いかけたぞ…あんだけデカい事ほざいたんだ、やれませんとか言わせないぞ」
「それがですね…王子なんですが」
　黒霧が言い淀む。
「私や弔も専用のコスチューム持ってるのになんで僕のは無いんだ！と駄々をこねていまして…ＢＡＲで先生が説得中です」

私のはコスチュームではなく私服なんですがね、と言葉が続いていたが弔には耳に入ってこなかった。
「…――ッのガキ!」
怒りに震えて上手く口が動かず、首元をガリガリと掻きむしる。
「分かっています死柄木弔。プラン通りに彼らと王子を運び準備させてすぐに戻りますので」
言うやいなや人の形が崩れ霧となり姿を消す黒霧、残された弔が怒りのままに独りごちる。
「あのクソガキ…ちゃんと敵してるのかと思ったら言うに事欠いてコスチュームだと?」
「オールマイトが終わったら次はあのガキをぶっ殺してやる…平和の象徴が居なくなれば用済みで先生も納得してくれるだろ」

◇◇◇

「次回にはちゃんと用意してあげるから。もちろんオーダーメイドだよ　それでも駄目かい?」
先生の説得は芳しくないようだ、とバーに戻った黒霧は思う。
ドクターがモニターには映らない位置から声を掛ける。
「弔に”お父さん達”が居るのがお気に召さんようじゃの」
「彼にも特別な衣装を拵えてやらんといかんのう、気持ちを盛り上げて貰わんといかん個性じゃし」
「王子、いつもの服装…そのフード付きのトレーナーは嫌いなのですか?お気に入りで何着も持ってるではありませんか」
黒霧が説得に加わると先生とドクターは彼のコスチュームをどうするかで話し合い始めたようだ。
「この服好きだけど…せっかく敵連合って名前付けてみんなで一緒に行動するんだよ?」
王子が不満そうな顔で黒霧の方にバーカウンターの椅子を回転させる。
「一体感って言うかさ?特別感みたいな?お揃いのTシャツ着るとか

手編みのマフラーを皆で付けるとかさ」
　黒霧は王子が言わんとする所が何となく分かってきた、思い出にしたいのだ…敵連合が発足したという今日この日を。
「Ｔシャツは個性によっては着れない方も居るでしょうし、マフラーは暖かい今の時分には貴方も付けたがらないでしょう」
　そう言いながらカウンターの内戸棚を開ける、そこから取り出されるは大きめの赤いスカーフ。
「私の私物ではありますがこれを差し上げます。他の方々の為にお揃いのＴシャツなどはいらないでしょう？」
　そう言いながら王子の首元にスカーフを動くとはためくように巻いていく。
「パーティの主役が輝けばいいのですから」
　スカーフをまじまじと見つめ、勢いよく顔をあげる王子。
「黒霧さんの？いいの？ほんとに？ありがとー！」
　口早にお礼を言いながら黒霧に抱きつこうとして…転送される。
「それではいってまいります先生、ドクター」
　そして自身をワープさせていく黒霧、モニター越しに見守るＡＦＯ。
「ああ頑張っておいで。弔にも伝えておいておくれ」

　王子が転送された先はＵＳＪの内部、倒壊ゾーンと呼ばれ様々な建築物が乱雑に折り重なっている。
「黒霧さんのバカー！顔打ったじゃない！」
　倒壊ゾーンに集められたチンピラ達が急にワープしてきて怒っている王子を前に戸惑っている。
「黒霧さん？このガキが生徒ですか？まだ予定時間にゃ早いと思いますが」
「彼は雄英の生徒ではありませんよ。我々の…隠し玉と言った所です」
　影が集まり人の形となるとチンピラ達が慄く、やはり敵連合の代表的な人達の個性は凄いと

「彼の個性はやや悠長でしてね、少々準備が必要なのです。さあ王子ここら一帯にある瓦礫を使い大きな球体を作りなさい」
そう王子に指示する黒霧、おでこをさすりながら恨みがましい視線には気がついていない。
「私は弔達を運ぶ準備をしなければなりません。ここに居る皆さんには迷惑を掛けないように固めて下さいよ」
一方的に言いつけ黒霧は去っていく…
ぷりぷり怒っている王子を遠巻きに見守るチンピラ達、どうしたらいいのか子供の扱いなぞ勝手が分からないが彼も敵(なかま)ならば声ぐらいは掛けないといけない。
「あー…準備しろって言われたろ?お前みたいなガキが何するか知らないが指示通りに動こうや?な?」
カメレオンを彷彿とさせる風貌の男が王子に近づき肩を叩く、それが合図となってか王子が飛ぶように立ち上がる。
「感謝のハグをなんだと思ってるんだ黒霧さんめ!スカーフくれたお礼もう言ってあげない!」
言うやいなや王子はボールを取り出し、壁に向かって目一杯の力で投げつける。
その急な行動にチンピラ達は驚はするものの子供の八つ当たりだと一笑に付す。
歪なボールだった為にイレギュラーバウンドを繰り返すがチンピラ達に当たりはしなかった。
何度か跳ね返ったボールを片足で止め、王子が部屋の中をドリブルで駆けだし―　部屋から飛び出した。
何だったんだあのガキは、本当に敵なのか?これから大仕事が待ってると言うのに気が抜ける…
倒壊ゾーンに居る誰もがガキの奇行に目を奪われ、そこに着いた時にはあった細々とした瓦礫が無くなり部屋が綺麗になってる事には気が付かなった。
「クソッタレめ!あの靄モブ野郎!」

「何処だここは!?散らしてとか何とか言ってやがったがアイツの個性か!?」
そうこうしていると黒い霧のゲートが開かれ金髪と赤髪の子供が出てきた。
コスチュームを着ている所を見ると、この子供達こそが雄英の生徒なのだろう。
さっきまでガキに迷惑させられていたんだ、目の前のガキにその鬱憤をぶつけてやるか…
そう思い、各々個性を発現しながらその二人に襲いかかる。

「これで全部か、弱ぇな」
異形化個性の男の顔面とマスクを付けた男の顔面を同時に爆破しながら金髪の生徒、爆豪勝己が周りを見渡しながら言葉を零す。
「っし!早く皆を助けに行こうぜ!俺らがここに居る事からして皆USJ内にいるだろうし!攻撃手段の少ねぇ奴等が心配だ」
マスク姿の敵を己の硬化した拳で打ち据えた赤髪の生徒、切島鋭児郎が気絶した敵を投げ捨て爆豪に返事をする。

そんな二人を部屋の天井に隅にへばり付き隙が出来るのをひたすら待っている者が居た。
個性カメレオン…擬態を使い、隠れ潜み獲物を背中に突き立てるその瞬間を狙っている。
あの二人は強い、他の連中には悪いが囮になってもらうしかなかった。
既に部屋には動く者はなく、あの二人は顔を合わせ話し始めた。
ペチャクチャダベりやがって!その油断が…
背後からナイフで一突きにしてやろう、そう思いナイフを振り上げ

忍び寄ったが背中を向けていた子供、爆豪に振り向く事もなく避けられ頭に手を置かれた。
マズい！そう思うまもなく爆破される、襲ってくる衝撃にさっきまで居たガキを思い出す。
隠し玉だが何だか知らないがここら周辺にはもうアイツしか居ない筈だ、あんなガキでもこの状況を打開してくれるなら何でもいい。
「あのガキ何処に…」

「俺等に充てられたのがこんな三下なら大概大丈夫だろ」
隠れていたモブを爆破しこれ以上ここに居ても意味がない、さっさとあのワープゲート野郎を抑えねばならない。
しかし、あのガキ？ここには俺と赤髪しか居ない筈、他に誰か巻き込まれでもしたのか？
周囲を見渡し残った敵も他の生徒も居ない事を確認し…──感じる違和感。
「つーか、そんな冷静な感じだっけ？おめぇ…」
目の前の赤髪が考え事の最中にふざけた事を抜かしてくる。
「俺はいつでも冷静だクソ髪野郎!!」
ああそっちだと言い、ホッとため息を吐いている、何なんだコイツは。
「…ここはパンフに書いてあった倒壊ゾーンで間違いないよな？」
赤髪に確認の意味で尋ねる。
「バスん中でパンフ読んでたのかよ、ちゃんとしてるな」
「テメェらがバスの中でずっとくっちゃべってるのが悪いんだろうが！」
前もってリサーチするのは当然だろうが！何なんだコイツ等は！
「ああ悪かった、それでどうした？確かにここは倒壊ゾーンな筈だな、あちこち壊れてやがるし」
お手上げとばかりにクソ髪が手を上げて話を戻してくる。
「ＵＳＪ…雄英はヌルくない筈だ、対人訓練の時の施設もそうだった」

あの時の事は今でも癪に障るが、戦った時の事や他の連中が使っていた施設を思い出す。
リアリティのある建物、朽ち果てた配管に老朽化した機械設備。
それとなく見回す、フロアの中だけでなく廊下の方にも敵が横たわっている。
爆破の加減をし、建物には被害を出さないように戦った…倒壊ゾーンならば衝撃でビルや家屋が倒れてもおかしくはない。
それだけに威力を考慮しつつ敵だけを念入りにぶっ殺した。
そう、だからこのビルには俺の爆破で壊れた所はない。
なのにこのビルはあちこち壊れ、窓は割れ天井にも穴が空いているのに瓦礫一つ落ちていない。
「一体なんの話だよ」
不思議そうに首を傾げる赤髪…確かに今気にする事ではないな。
「何でもねぇ…じゃあな行っちまえ」
「待て待て、ダチを信じる…！男らしいぜ爆豪！ノったよおめェに！」

◇◇◇

「♪～♪～」
鼻歌混じりでボールを転がしている王子、少し前まで憤っていた事なんてすっかり忘れ、大きくする事が楽しくて仕方ない。
倒壊ゾーンで集めた瓦礫を順調に固めて転がして徐々に大きな瓦礫を巻き込み始めている。
最初はボールを足でドリブルして転がしていたが今では腕で押し込んでいる。
その大きさ直径で3メートル、バスケットゴールの高さに届かんばかりだ。
少しづつ大きく綺麗な球体になっていく様を満足そうに眺める、もっと幼かった頃に夢中になっていた黒光りする泥団子制作のそれに近い。
「そーいやオールマイトが来るとか言ってたっけ」

不意に止まり、やるべき事を思い出した。
倒壊し真っ二つに折れているビルを固めるまで大きくしよう！などと勝手に目標を決めていたが、そんな事をしていては弔や黒霧に怒られてしまう。
「すっかり忘れてたなーまずいなぁ…まだ間に合うかな？」
何処だっけ、とボールを転がしながら視野を広げる…見えた、噴水の方だ。
敵連合の皆も居るけど寝っ転がってる…オールマイトにやられちゃったのかな？
オールマイト強いからねー、そんなのほほんとした感想を思いながら転がしていると黒霧さんが金髪のヒーローに抑え込まれている姿が見えた。

「攻略された上に全員ほぼ無傷…凄いなぁ最近の子供は…恥ずかしくなってくるぜ敵連合…！」
黒霧を押さえられ、苛立ちを隠せない弔は凍って動けない脳無に奪還の指令を出そうとして…取りやめた。
「脳無、爆発小僧を…さっさと起き上がってオールマイトを始末しろ」
黒霧のワープゲートの中で半身を轟焦凍の個性半冷半燃で凍らされた脳無が動き出す。
右半身が凍ったままだが立ち上がる、無理に動き出した為に身体の至る所が崩れ落ちるが意に介さない。
崩れ落ちた矢先、残った身体から異様な速度で盛り上がる骨や肉、筋肉組織で覆われる身体。
数秒もしないうちに脳無の身体は五体満足になった。
警戒したオールマイトが前に出る
「皆下がれ!!なんだ!?ショック吸収の個性じゃないのか!?」

「別にそれだけとは言ってないだろう。これは超再生だな」
それを聞き得意げに語りだす弔。
「脳無はお前の１００％にも耐えられるよう改造された超高性能サンドバッグ人間さ」
「それとオールマイト、実はもう一人居るんだ…お前に対抗する為に集められたヤツが」

それは灰色の塊だった。
遠くからゴロゴロと音をたてながら一直線にこっちに向かってくる。
それに気づいた轟焦凍が個性を発動し氷塊を出したが大岩が方向転換し…飛んだ。
近づけば近づく程にその球体の正体は見て取れた。
ほぼコンクリート片で出来ており、至る所に補強材の鉄筋を覗かせておりビルの窓枠などもある。
そんな塊が弾力を持つゴムボールの様に跳ね、着地する。
そんな異質な物体が地面に着地したと思ったらその場で急速に縦回転し始める、その場からは動かないが回転数だけが上がり続け…爆豪と黒霧の方へ解き放たれた。
「…いかん!!」
オールマイトが出せる最大速度で爆豪に近寄り生徒達の方へ飛ばす、そしてオールマイトを狙ってきた脳無を迎撃する。
脳無との瞬間の攻防。
その戦いを制したのはオールマイトであったが、転がってきた大岩の対処を見誤った。
「ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ!!」
彼は自分の力に自信があった。
平和の象徴として全ての悪意をその拳で粉砕してきたという自負が、この程度の障害物なら砕けると。
しかし彼の目論見通りにはいかなかった。

大岩が砕ける所か拳を振り抜いたと言うのに一切の衝撃も発生せず、それどころか殴った自分自身が拳を突き出したままの姿勢で大岩と転がりだしたのだ。
「ｗｈｙ!?」
ショック吸収と呼ばれてた敵、脳無を殴った時にさえ感じた手応えが大岩相手には何一つ感じる事がなかった。
そのまま転がり続ける…何度も身体が地面に激突するが、どういう事か身体には一切の痛みも衝撃もない。
初めての出来事に為す術もなく転がり、噴水の側でゆっくりと止まった。

「黒霧さん大丈夫?なんか捕まってたねー黒霧さんなのにねー」
ボールの影から王子がひょっこり顔を出し声を掛ける。
「あ、もう大丈夫!私が来た!」
大きく胸を張り腰に手を当てる、オールマイトの真似だろうか。
「そうだオールマイト!生マイト何処かな!?」
マイペースな王子に弔の苛立ちが募っていく。
「クソガキ!今まで何処ほっつき歩いてやがった約束の時間と全然違うじゃねーか!」
「またガキって言った、なんかクソがついてもっとダメな感じになってる」
「死柄木弔!王子!話をしてる場合ではありません!脳無を止めて下さい!」
普段冷静な黒霧が大きな声で二人を諌める。
「あァ?予定とは違うがやっとラスボスが罠に掛かって―」
これからボーナスゲームだろ、そう言おうとして…脳無がオールマイトに殴りかかり固まった。
遅かった、と隣で呟く黒霧、更に攻撃をしようとする脳無だが身体を少し揺らすしか出来ないようだ。
「あー…固まっちゃったねえ」
そう言うと近づいてオールマイトの顔と脳無の拳の接地点をペチ

ペチ叩く。
「しょ、少年！これは君がやったのかい!?」
大きな拳が顔に張り付いてしまい王子を見る事が出来ないオールマイトだが、近くに居る少年が個性の持ち主であろう事はすぐに理解出来た。
「そうだよオールマイト！うわー本当に髪の毛なんだ、ずっと角か何かだと思ってた…あれ？よく見るとコスチューム着てない！レアだね！」
塊にくっついたオールマイトの髪の毛を無遠慮に握ったりYシャツを触りながら嬉しそうにしている。
苛立ちを抑えきれない弔は首を両手でガリガリと掻き毟る。
「おいクソガキ。脳無だけ解放しろ、雄英の生徒を始末して貰うんだから」
その言葉にオールマイトは焦る、自分が動けない今あの脳無を止められる者は居ない。
いや居たとしても生徒を危険に晒す訳にはいかない、何とか脱出を試みようとするも足を少し動かせるぐらいだ。
普段なら少しでも動かせるなら個性の力で何とかなるがＯ（ワン）Ｆ（フォー）Ａ（オール）が発揮されない…これも少年の個性なのか？
それに個性を発現出来ないのなら何故自分はトゥルーフォームにならないのか？
疑問が疑問を呼ぶが今はそれどころではない、なんとしてもこの場を打開せねば…ッ！
「えー？無理だよ弔。そんな器用な事出来ないし、もし剥がれてもオールマイトも一緒に剥がれるよ？」
脳無が生徒達を襲うと言う惨事は少年の発言から実現し得ないとホッとするも問題は解決していないのだ。
「それにせっかくオールマイトくっついたんだからさ！このまま持って帰ろうよ！」
まさか自分自身が拉致の対象になるとは思いも寄らなかったオールマイト。

「王子、申し訳ありませんがそれは出来ません…貴方の個性は私も固まってしまいますので」
謝辞を述べる黒霧の隣で苛立ちが頂点に達した死柄木弔が自分の手でオールマイトを始末しようと手を伸ばす。
「―ッ!?いけません弔!」
既の所でワープゲートを使う黒霧、弔の手は近くの噴水を粉砕するだけに終わった。
「何すんだ黒霧ィ!」
「落ち着いて下さい死柄木弔、王子の個性は我々の個性の発動よりイニシアチブがあるのです」
説明しつつも球体に近づく弔の間に割って入り、押し留める。

それを生徒達が指を咥えて見ている訳がなかった。
爆豪が爆破で飛びかかり、轟は氷で牽制をする。
「どうやらそのクソ球体は触れなきゃいいんだろ!」
中距離を保ったまま爆破を浴びせる爆豪、それに合わせる様に氷の壁を出しボールの退路を塞ぐ轟。
「まずはオールマイトの解放だ、爆豪その子供を狙え」
「命令してんじゃねえ!そんな事は言われんでも分かってんだよ!」
激昂しながらも的確に王子を狙う爆豪、慌ててボールを動かし始める。
「寒いし熱い!凄い個性だね!でもヒーローネーム知らないな、もしかして雄英高校の生徒なの?ヒーローの卵だ!」
口早に相手を褒めながらボールを壁にしつつ後退する王子、氷壁が道を塞ぐが大きさがマズかった。
球体によって氷が砕かれ、その破片が球体に幾重にも重なり固まり更に大きくなるボール。
それを見た爆豪が叫ぶ。
「クソ紅白!相手に塩を送ってんじゃねーぞ!」
「塩じゃない氷だ」

「ンな事言ってんじゃねーよ！クソがッ！」
怒り散らした爆豪が勢いそのままに飛び上がり、空中から連続して爆破していく。
「テメェはモヤモブとクソ手野郎に行け！モヤは胴体が弱点！手はクソ球体と同じで触らなきゃ何とでもなる！」
噴水を砕いた瞬間を見逃していなかった爆豪が相手の個性を分析する。
確かにこのまま氷で相手するには不利だ、左を使えば球体に巻き込まれる事なく追い込む事が―
いや、左は使わないと決めたんだ。
「相性差があるな…爆豪、球体は任せるぞ」
「ほざけ！もともとこんなヤツ俺一人で十分だ！」

「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
身体中を掻き毟りながら弔が苛立ちのままに声を発する。
仲間のガキも！敵（ヒーロー）のガキも！これだからガキは！
「落ち着いて下さい死柄木弔　確かに脳無は動けませんが残っているのは所詮生徒達」
そう言いながら目の前の赤い髪の少年の攻撃をいなしながら生徒達の前に立ち塞がる。
「…そうだな、そうだよな。平和の象徴の前にガキの首を並べるんだった…その後オールマイトを殺す」
血走った目を顔に張り付いた手の隙間から子供達に向ける。
目の前に立つのは赤い髪と緑の髪の二人だけだ、確かに脳無は強いが元々ガキなんぞ俺の手でも何とでもなる。
「やるぞ黒霧クリアして帰ろう」
気を取り直し黒霧に指示をするが…それは氷の壁で分断された。
「てめぇらの攻撃はさっき見た。もやに手を突っ込んで触ってくるんだろ？」
轟焦凍が更に氷を出し、分断と同時に攻撃に転じる。

「轟くん！球体の個性の方に向かったんじゃ？」
　緑髪の生徒、緑谷出久が驚いたように振り返る。
「ああ、だが爆豪が一人で十分とか言ってたんでな」
「かっちゃんなら確かにあの球体の個性に優位だオールマイトや怪人すらも身動き取れなくさせる程の個性なら安易に近づいてはいけないし直接の攻撃は愚策だから爆破で追い詰めればいいでもあの球体はオールマイトがＤＥＴＲＯＩＴＳＭＡＳＨを放っても壊れる事なく動いていたからあの球体もショック吸収の個性を持ってる可能性が？それに触れる物をくっつけてしまう個性は峰田くんのくっつくボールと似ている様で違う峰田くんのボールは粘着性を持ちあくまでそれそのものにだけ影響するがあの球体のくっつき方はくっつけた物が更に他の物を吸着させる様になってる？そうだとしたら―」
「おい緑谷怖ェし目の前の敵に集中しろって」
　切島がブツブツ言い出した緑谷にツッコミを入れる。
「ご、ごめん！でもあの球体は危険だよ！ここがドームで良かったかも知れない。もし野外だったら大変な事になってたかも」
「話はあとだ。敵の危険性を問うより捕まえてしまえばいい」
　轟が更に氷を出し牽制するが黒霧には避けられ、弔には崩壊させられる。
「俺が手の方を止める、近づくと危険だからな。お前ら二人はあっちのモヤを頼む」
「う、うん！モヤの弱点はかっちゃんが暴いた！僕らの打撃でもうまく胴体に当たれば何とかなる筈！」
　緑谷の言葉を聞き切島が硬化した拳を打ち付けて気合を入れる。
「っし！やるぞ！オールマイトだけに頼ってちゃいけねぇ！俺等もやるんだ！」
　いざ！と駆け出そうとした所に爆風が届く、爆豪が空から爆撃をしてはいるが大きな球体がこっちに迫ってきている。
「爆豪、球体はそっちで何とかすると言ってただろ」
　轟が球体にではなく地面を凍らせ時間を稼ごうとするが速度が落ちる事はなかった。

「うるせェ！噴水やら倒れてるモブ敵を取り込んでから更に大きくなりやがってガキが見えねェんだよ！」
上空から様々な角度で狙っているのにこちらの居場所が分かっているのか、ボールの影から一切姿を爆豪に晒す事はなかった。
だからと言って地面ごと爆破すると土砂すら取り込まれると考え、大規模な攻撃は控えていた。
倒壊ゾーンがやけに綺麗だった理由はコイツか、今更ながら少し前の疑問が解決したがそれどころではない。

「黒霧さーん！助けてー！」
爆破に追われながらボールを転がしてこちらに向かってくる王子、それのおかげで分断していた氷壁が壊れ、弔と黒霧が合流する。
「よくやりました王子、反撃と行きましょうか」
弔の側に立ちワープゲートを広げ―そこに銃弾の雨が襲い、弔が負傷する。
「っ!!!なんだ!?」
急いでボールの影に避難する弔と黒霧。

「1―Aクラス委員長飯田天哉!!ただいま戻りました!!」
ＵＳＪの入り口に大勢のヒーロー達が現れる、雄英高校きっての教師陣。
その教師のひとり、テンガロンハットを被りドレッドヘアーと外套をなびかせガスマスクで顔を覆ったカウボーイ姿の教師、スナイプが特殊な形状をしているリボルバーで狙撃する。
その射撃はＵＳＪの入り口からだと言うのに噴水のあったセントラル広場は勿論のこと、遠く離れた山岳ゾーンの敵にまで及ぶ。
彼の個性はホーミング、銃弾が届くのであればどんなに遠くても命中させる事が出来る。
その教師陣のシルエットが弔の目に映り、観念したかの様にため息

を吐く。
「あーあ、来ちゃったな…ゲームオーバーだ。クソガキお前が時間に遅れたからだぞ」
「えー？僕のせいなの？ところで弔、腕とか撃たれてなかった？痛くないの？」
「痛えに決まってるだろ、はぁ…帰って出直すか黒霧…」
黒霧がワープゲートを広げようとするとその霧が吸い込まれ始める。
「僕だ…！」
背中をやられ、うずくまっていた１３号が片手をこちらに向けて個性であるブラックホールを使用している。
「霧が引っ張られる…！」
そんな攻防の最中、１３号に向かって直径５メートルは超えた巨大な球体が迫る。
「それ持って帰れないんだってさ、だからあげるよ」
そう言い残し霧の中へ消えていく王子、主が居なくなった球体はゆるりとした速度で転がる。
「くっ！」
外側には敵とはいえ人が、その内側にはオールマイトが居る！個性を止めゆっくりと迫る球体に巻き込まれる１３号。
「っ！１３号先生！」
切島や緑谷達の声も虚しく、轢かれてくっついてしまう。
しかし押し手が居ないからか、そこで止まる。
自由になった霧の中に弔が姿を消す。
「今回は失敗だったけど……今度は殺すぞ、平和の象徴オールマイト」
怨嗟の言葉を残し、霧が消滅する。

敵の主犯格であった者達は消え、戦場であったセントラル広場は静けさを取り戻した。
ただひとつ

巨大で不気味な球体を残して―

Ｎｏ．３

「なんてこった…」
帽子を目深に被り直し、己の失態に悔いるスナイプ。
射撃の腕には覚えがあったが主犯格であろう者達を逃してしまった。
「これだけ派手に侵入されて逃げられちゃうなんて…」
教師でありながら１８禁ヒーローでもあるミッドナイトがＵＳＪで起きた戦闘の被害を見ながら呟く。
「完全に虚をつかれたね…それよりも今は生徒らの安否と…あの球体さ」
その場の誰よりも小柄な根津校長が沈黙をしている球体を鋭く睨む。
誰よりも小さいのは当然、彼は人ではなく鼠…個性ハイスペックが発現し人間よりも遥かに優れた頭脳と毛並みを持つ、まさに秀外恵中。
その彼を以てしてもあの球体は異物であり見通す事が出来ずにいる。
「ハウンドドッグはＵＳＪ内部の生徒の確認を、エクトプラズムも一緒に…」
根津が伴ってきた教師に指示を出し、素早く行動に移すヒーロー達。

「オールマイト先生！１３号先生！無事ですか!?」
球体に駆け寄ろうとする緑谷と切島、だがコンクリートの壁に阻まれてしまう。
「動きは止まっているが危険なのは変わり無い、我々が対処するから生徒達は入り口ゲート前に集まってくれ」
顔も身体も指先さえも四角い教師、セメントスが個性セメントを使って球体を隔離する。

「は、はい！」「ラジャっす！」
足早に入り口に向かう二人とすれ違うように幾人の教師が現れる。
「１３号！聞こえる？服がだいぶやられてるわね…傷はどの程度なの？」
球体の底面に怪我をした背中からくっついている１３号に向かってミッドナイトが話しかける。
「ミッドナイト…自分の個性で背中を大きく傷つけてからずっと激痛に苛まれていたのですが、今は痛みもなく身動きも取れません」
１３号は自身に起きている事を語りだす。
「この球体に轢かれてからと言うもの平衡感覚も失われてるようです。上も下もない…そんな感じです」
容態が悪化して前後不覚に陥ってる？とミッドナイトが思っていると、その声に呼応して球体の内側から声が聞こえる。
「その声は香山く―ミッドナイトに１３号ですか!?」
球体の中からオールマイトの声が聞こえ、狼狽えるミッドナイト。
「オールマイト！もしかして中に居るの!?怪我とかしてないでしょうね!?」
「はい怪我はありませんがこちらも身動きが取れず―　それよりも！私の目の前に脳無と言う改人が同じく身動きは取れませんがまだ戦闘態勢で残っています！」
オールマイトが脳無の個性や戦力を伝え、周りの教師達の顔色が変わる。
「オールマイト並…厄介ってレベルじゃないわね。呼吸してるのかしら？オールマイトには息を止めて貰って私の個性で眠らせましょうか？」
個性”眠り香”彼女の身体から発せられる香りは嗅いだものを須らく深い眠りに落とすミッドナイト。
「その脳無の無力化もそうだけど、この球体自体も何とかしないといけないのさ」
教師の一人、ブラドキングの肩から降ろされ根津校長が会話に参加

する。
「校長先生!?危険ですからお下がり下さい！」
　球体に近づいて行く根津を止めようとするミッドナイト、連れてきたブラドキングも不服そうな顔つきである。
「危険は百も承知さ！その危険を取り除く為に観察し　私も脳漿を絞るのさ！」
　小さな胸を張る根津に周りに居る教師の面々は困惑する。
「根津校長、貴方は実働向きではありません。後方から指示をお願いします」
　教師達に促され渋々と下がる、球体を囲っているコンクリの壁面に窪みを作ってそこから観察する妥協案になった。

「しかし見れば見る程に不思議な球体だね…見てごらん、あれは轟焦凍くんの個性で作られた氷だね。あれだけ人がくっついてるのに溶けるどころか水滴一つ付いてないのさ」
　根津が指差した先には敵が何人もくっついていて見えづらい位置だったが氷片が見える。
「私の見立てではオールマイト…君の制限時間はとっくに過ぎている筈だけど、まだいつもの格好だね？」
「！　その通りです、私も疑問に思っていたのです。力は発揮出来ないのに何故かトゥルーフォームに戻らず姿はこのままなのか…根津校長はその謎を早くも解明したのですね？」
　個性ハイスペックは伊達じゃない、オールマイトは自分の上司が素晴らしい力を持っている事に感謝した。
「解明と言うにはまだ早いさ、ただ私の推測では…非常にまずい事態さ」
　根津校長の言葉に、その場に居る教師達は固唾を呑んで見守る。
「この球体はくっついた物質を固定してしまうのさ。その時の状態から変わる事無く…13号が痛みもないと言う言葉から察するに痛みを感じると言う事さえ固定し遮断してるのさ」
「つまり…私の個性では中にいる脳無を眠らせる事が出来ない？」

自分の個性を鑑み、ミッドナイトが校長に尋ねる。
「そうなるね。しかしオールマイトや１３号が意識を保ち、こうして会話が出来るのが私でも分からないままなのさ」
「声を出せているから喉や肺も動いていると言う事に…脳の電気信号も固定されていない？信号を観測する為に電極を刺して…」
校長の声がどんどんと小さくなっていき、自身のトラウマへと繋がってしまう。
「その…校長？この球体相手に我々が取れる手段は何かないのでしょうか？」
黙考し始めた校長にブラドキングが恐る恐る問い質す。
「おぉっと危ない所だったのさ！そうだね、オールマイトでさえ捕まってしまった所を鑑みるに　力技ではどうにもならないのさ」
「マズいと言ったのはこの個性が球体自身も固定しているなら外部からの干渉ではどうにもならない可能性があるのさ」
個性を生み出した本人に解除して貰うしか―そう言いかけた時、突然球体が崩壊し始めた。
外側に張り付いていた敵達が次々に地面に落ちてくる。
「一体何故いきなり!?ってそれどころじゃないわ！」
ミッドナイトが手に持っていた革鞭をしならせ１３号の足へと巻きつける。
球体の底面に位置していた為に崩壊に巻き込まれる可能性があり、怪我をした彼女では押し潰されるのは耐えられないと判断した。
「ごめんなさい！少し我慢してね！…ブラド！」
鞭を絡ませた足を引っ張る、１３号の身体に負担は掛かるが咄嗟の事でこれが精一杯だった。
「応っ！」
飛んできた１３号を抱きかかえる様に優しくキャッチする、腕から出た大量に出た血液で。
ブラドキングの個性は操血、自身の血液を自由に操る事が出来る。
「皆！下がってくれ！ヤツが動きだしたぞ！」
崩壊し始めた球体から空に向かって二つの大きな影が飛び出す。

オールマイトと脳無が空中で殴り合い、両者共に弾け飛ぶ。
「ブラドは13号をゲートへ！ミッドナイトは球体に張り付いていた敵を個性で無力化！セメントスはオールマイトの援護さ！」
根津が指示を飛ばしながら自身もゲートへ移動を開始する。

「ｗｈａｔ　ｔｈｅ　ｆｕｃｋ!?オールマイトが居ないと思ったらまだ敵がいやがったのか！」
ＵＳＪ入り口で少しづつ集まりつつある生徒達を保護していたプレゼントマイクが空中で激突する二人を確認する。
「オールマイトとやりあってるなら敵だな。今度は逃しはしねえ」
オールマイトに殴られ飛んでいく脳無に向かって四発射撃する、しかしそれは当たりはしたものの全て弾かれた。
「何だと!?銃弾が効かないだと!?」
リボルバーを構え直し弾倉に有らん限りを撃とうとした所、階下から生徒が走ってくる。
「スナイプ先生！あの黒い巨体の敵はショック吸収と超再生の個性を持っています！」
緑谷が息を切らせながらも脳無の個性や改人である事を説明する。
「ｗｈａｔ　ｔｈｅ　ｈｅｌｌ！そんな化け物が居た…いや作ったって言うのか!?」
その場に居る教師や他のクラスメイトは驚きを隠せない。
「あの敵は手のついた敵の指示を聞いて動いてました、つまり耳…三半規管があると思います」
「脳についてる目も飾りではなくちゃんと見てから動いていましたので、そこで―」
緑谷が教師達に自分の分析を説明していき、そこで言葉を遮られる。
「そこまで聴けば十分だぜ緑谷ＭＣ！耳寄り情報だ！スナイプいけるか!?」
「勿論だ、見る限り他の動いてる敵は居ねえ…あのデカブツだけだ。オールマイトだけにやらせる訳にはいかねえな」

リボルバーに特殊な弾丸を装填しつつ、タイミングを計る。

「ほんとにいくら殴っても効かないね！」

襲いかかってくる脳無、オールマイトは周囲に被害が出ない様、広場から離れた場所に移動する。

正面から拳を交え、隙あらばまたバックドロップを狙おうとするも攻撃の連打がコンパクトでなかなか懐に入れさせてくれない。

「このままでは消耗戦だな！君はスタミナにも自信があるのかい！」

このままじゃ先にこっちが参ってしまう、ならばやらねばなるまい!!

そう覚悟を決め、拳を強く握り込んだ時―

「オールマイトォ！援護するぜェ！少し間合開けてくれェ！ｙｅａｈ！」

ドーム全体に響くプレゼントマイクの声、その声にいち早く反応し拳を繰り出す。

「ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ!!」

強烈な一撃を浴び、大きく後退する脳無。

そこに狙い澄ました銃弾が脳無の顔面に複数発当たり、顔が蛍光イエローに染まる。

スナイプが放ったペイント弾で視覚を奪われた脳無に更なる攻撃が加わる。

オールマイトは目の前の大気が震えてるのが見て取れた、プレゼントマイクの個性である声が指向性を伴って脳無を襲っているのだろう。

超再生と言えども視覚を奪われ、聴覚を揺さぶられては真っ直ぐ立つ事も出来ない。

覚束ない足元のコンクリートがうねり、脳無の身体に絡みつき拘束する…セメントスがオールマイトに追いついたようだ。

「みんなありがとう！」
会心のスマイルで援護に答え、脳無へと距離を詰める。
「ショック吸収…凄い個性だけど手の敵が君の弱点喋っちゃったからね、悪く思わないでね」
「敵よ、こんな言葉を知ってるかい」
拘束されている脳無の背後に立ち、首を締め上げる…チョークスリーパーホールドだ。
「ヒーローはいつでも助け合いってね」

◇◇◇

ＵＳＪのゲート前に多くのパトカーと送迎車輌が並び、慌ただしく警察関係者が出入りしている。
「１７…１８…１９…生徒は全員無事な様だね」
警部である塚内が生徒の数を確認する。
敵を拘束し連行してゆく傍ら、１―Ａの面々がひとかたまりになって各々の無事を確認しあっている。
「とりあえず生徒らは教室に戻ってもらおう。すぐに事情聴取ってわけにもいかんだろ」
「刑事さん、相澤先生は…」
生徒の一人、蛙吹梅雨が担任の安否を気遣って尋ねてくる。
「そうだね、病院に連絡してみようか」
数コールもせずに繋がり、怪我の現状を伝える…

「相澤くん…くっ！私がもっと早く駆けつけていたらっ！」
オールマイトが俯いて己の不甲斐なさを悔やむ。
「ヒーローが身を挺していなければ生徒らは無事じゃあいられなかったんだ。悔やむより先に成すべき事をしよう…丁度移動牢（メイデン）が着いたようだ」
塚内がオールマイトの側に寄りそろそろ時間だろ？と耳打ちする。
「直接脳無とやりあったオールマイトは事情聴取するから一緒に来て

くれ…校長先生、念の為に校内を隅まで見たいのですが」
「ああもちろん！一部じゃとやかく言われているが権限は警察の方が上さ！捜査は君たちの分野！よろしく頼むよ！」
塚内の意図を読み取り快諾する根津、ここからオールマイトを連れ立ってくれる様だ。
「三茶！後頼んだぞ」
猫の個性を持つ部下に現場を任せＵＳＪを後にする。

「セキュリティの大幅強化が必要だね」
現場検証が終わったＵＳＪ、根津がドームの被害を見ながら呟く。
「ワープなんて個性ただでさえものすごく希少なのに、よりにもよって敵側にいるなんてね…」
隣に居るミッドナイトが途方に暮れた顔をする。
「それだけじゃない。イレイザーヘッドを負傷させた人物、触った物を壊す個性…崩壊とでも言うかな」
「それとオールマイトすら拘束する球体の個性…彼らに逃げられてしまって頭が痛いよ」
立ち入り禁止と書かれたテープが様々な場所に貼られたままの広場を歩きながら根津がごちる。
「ＵＳＪの修繕費の方も頭を悩ませそうだよ」
ハハッと空笑いしながら壊れた噴水の側にまで来た、その近くに件の球体が崩れたままで残されている。
オールマイトが飛び出した際に多少散らばってしまってはいるが、瓦礫の大半はそのままだった。
「あの時…急に球体が崩れたのはなんだったんでしょうか」
ミッドナイトがあの時の事を思い出しながら校長に聞いてみる、ハイスペックの個性ならば何か気がつく事もあるかもしれないと。
「制限時間がある…本人が離れてしまうと消える…一つしか球体は作れなくて帰った先で個性を使ったか」
幾つもの推論を並べながら残された物を眺める根津、既に轟が作っ

た氷は解けてしまっている。
「残念ながら憶測の域は出ないのさ、今までオールマイトが足止めされるなんて事は起こり得なかったのさ…ん？」
　急に足止める根津、後ろを歩いていたミッドナイトに蹴られそうになってしまう。
「校長先生？危ないじゃないですか蹴っ飛ばすところで―」
「ミッドナイト、急で悪いんだけど私を持ち上げてくれないか？」
　持ち上げろと言う割に根津は移動してしまう、掴みそこねたミッドナイトが何事かと声をあげる。
「すまないのさ！持ち上げて欲しいのはこの場所からなのさ！」
　上司の急な行動に疑問が湧くが根津を両手で持ち上げる。
「俯瞰して見る事で気がつく事があるってね！僕がもう少し身長が高ければもっと早くに気がついたのかも知れないさ！」
　冗談混じりにミッドナイトに話しかける。
「それで何が分かったんですか校長先生？」
「よく見てごらんミッドナイト、オールマイトが崩壊してる最中の球体から飛び立ってくれたおかげで崩れた球体に穴が出来ているだろう？」
　確かに瓦礫が一部吹き飛んでクレーターのような穴が出来ている。
　球体の外側、敵や氷と割れた噴水孔しか知らなかったが…中はコンクリートだ。
　こんな質量な物が１３号の上に落ちてくれれば彼女の怪我はもっと酷いものになっていただろう。
「中はコンクリートですか、こんな重そうな物を転がしていたなんて…この個性の持ち主もオールマイト並の力をもった脳無なんでしょうか？」
「その可能性もあるかもね。でも報告には子供、それも義務教育が始まってるかどうかぐらいの子が転がしてたそうだよ？」
　ミッドナイトの質問に答えつつ、もう下ろしていいのさ、と根津が言う。
「この個性にはルールがあるね…ほら瓦礫が内側から外に向かってグ

ラデーションの様になっているのさ」
　そう言われてミッドナイトは改めて瓦礫を見る…確かに中心部分の瓦礫と外側では明らかにサイズが違う。
「オールマイトでさえ止められなかったけど対処出来るヒーローに心当たりがあるのさ」

Ｎｏ．４

「ってえ…」
両腕を撃ち抜かれた弔がワープゲートから倒れる様に出てきた。
だが自分の怪我より何より言わなければいけない事があった。
「クソガキ…お前が脳無を固めなかったらゲームクリア出来てたんだぞ、先生の言っていた通り平和の象徴は弱っていた…！」
痛みに歯を食いしばりながら先に戻っていた王子を睨みつける。
「帰ってくる前も弔は僕のせいだーって言ってたけどさ？あんなにいっぱい居た敵連合の皆だってやられてたじゃん」
カウンター席で足をブラブラさせながら不貞腐れている。
「手下共は瞬殺…生徒も強かった…俺は両手撃たれた…今回の作戦は失敗だ…」
痛みと虚脱感が弔を襲い、ぐったりとした様子で呟く。
カウンターに置いてあるモニターが起動する。
「見通しが甘かったね」
「うむ…舐めすぎたな、敵連合なんちゃうチープな団体名でよかったわい…ところでワシと先生の共作、脳無は回収してないのかい？」
ＡＦＯとドクターが帰ってきた弔達を待っていたかの様に話しかけてきた。
「脳無は王子の塊に巻き込まれてしまいました…オールマイトと一緒に」
医療キットを携え、人の形へと変わりつつある黒霧がドクターへ答える。
「へえ？…それは本当かい王子？」
ＡＦＯが喜色をたたえ、上ずった声で尋ねてくる。
「そうだオールマイト！せっかく固めたのに黒霧さんが持って帰れないって！先生何とか言ってよ！」
「王子、あなたとの初対面の時に私は固められたのですが…もうお忘れですか？」
倒れている弔を治療しつつ黒霧が多少の嫌味を込めて返す。

「ほほう！オールマイト本人とそれと同じぐらいのパワーにした脳無両方をか!?」
「ふふふっ…君の個性は本当に面白いよ王子、よもやオールマイトすらとはね」
　驚くドクターと喜びを隠しきれない様子のＡＦＯ。
「でも君のことだ、塊をそのままにしておく。なんてしてくれないよね」
「ボールの事？うん、手元にないと落ち着かないかな」
　そう言ってボールを虚空から生み出して膝の上に乗っける。
「勿体なかったなー…オールマイト星とか凄そうだよね！太陽より明るそう！」
　敗北を喫し逃げてきたと言うのに、のほほんとしている王子に苛つきが収まらない弔。
「オールマイト…そうだ…一人…オールマイトフォロワーの子供が居たな…俺に向かってＳＭＡＳＨだと…ガキが！」
　水害ゾーン付近に居た生徒を殺そうとしてイレイザーヘッドと子供に邪魔された事を思い出し腹を立てる。
　そんな弔を宥める様に励ます様にＡＦＯが語りかける。
「確かに今回は失敗だったかも知れないが決して無駄ではなかったハズだ。精鋭を集めよう！じっくり時間をかけて！我々は自由に動けない！だから君のような”シンボル”が必要なんだ。死柄木弔!!次こそ君という恐怖を世に知らしめろ！」

◇◇◇

「さーて実況してくぜ！解説アーユーレディ!?ミイラマン!!」
　ＢＡＲにワープで現れるとモニターから快活な声が響く、王子が雄英高校体育祭の中継を見ているようだ。
「おはよー黒霧さん！良いタイミングだね！丁度始まるよ！一年生の最初は障害物競争だって！なんかロボットがいっぱい居るよ！楽しそう！」

昨日の夜から全学年分の録画を頼んできたりとテンションが上がりっぱなしの王子が画面の前を陣取っている。
カウンターの中に入りつつ映像を見ると人より少し大きい程度のロボが氷によって凍っている。見覚えのある個性だ。
「おはようございます王子。今日の実地ですが…ずっと体育祭を見ていそうですね」
「体育祭何時までだっけ？お勉強は終わったらでいい？そしたら絶対やるから、ね？」
黒霧にお願いする王子だが画面からは視線を離さずに話す。
「王子、人と会話するならちゃんと相手と向き合わないといけませんよ。それと今日は私も用事が出来てしまってキャンセルなのをお伝えしにきました」
カウンター内でテキパキと食事の準備をしながらスケジュールを確認する。
「先生からの要請で”ヒーロー殺し”と接触しろと言われておりまして。潜んでると思われる保須市を探してこようと」
出来上がったサンドイッチを二つのバスケットに詰めて片方を王子の側に置いておく。
「ヒーロー殺し？テレビでも何かオールマイトがどうとかって言ってたね、敵連合に呼ぶの？」
「それは死柄木弔次第ですね、私としては彼は敵連合にとって大きな力となってくれると思ってはいますが…」
プロファイリングでは信念に殉じる思想犯であり、王子とは別の意味で弔と噛み合わない可能性もあるが—
「それでは行ってまいります。ブランチはそこのバスケットに入ってます、飲んでいい飲み物は冷蔵庫の下の段にある物だけですからね」

◇◇◇

数日後
普通のＢＡＲであれば相応しくない男が招かれた。

その男は素顔を包帯で隠し、身体の至る所に刃物を装着した長身痩躯―
ヒーロー殺しステイン。
「なるほどなァ…お前達が雄英襲撃犯…その一団に俺も加われと」
「ああ頼むよ、悪党の大先輩」
カウンター席に座り、現れたステインに気軽く話しかける弔。
「……目的は何だ」
「とりあえずはオールマイトをブッ殺したい。気に入らないものは全部壊したいな、こういう…クソガキとかもさ…全部」
そう言ってカウンターに置いてあった写真をステインに見せるよう掲げる…雄英体育祭の時の緑谷出久が写っていた。
「えー?ぶっ殺すの?体育祭凄かったじゃん1―A組のみんな!仲良しだから全員一つに固めてあげたいなー」
足を投げ出し床に座っている王子が弔に文句を言う。
「興味を持った俺が浅はかだった…お前は…ハァ…俺が最も嫌悪する人種だ」
ステインの鋭い眼光が弔と王子を見抜く…その両手は腰に携えたナイフを握っている。
「子供の癇癪に付き合えと?ハァ…癇癪どころか…年端のいかない子供そのものまで…ハァ…敵連合とは託児所か何かか?」
抜身のナイフを両手に垂らし、明確な殺意を弔にぶつける。
「信念なき殺意に何の意義がある」
そう言い残すとステインが黒霧に襲いかかる。傷を負った黒霧を見て王子が飛び出し―

「大丈夫ですか王子」
気がつくと部屋の隅で黒霧に介抱されていた。
文字通り一蹴され、壁に身体を打ち付けられ気絶していた様だ。
「ステインって強いんだね！黒霧さんがステイン欲しいって言ってたの分かるよ！」
「目覚めての第一声がそれですか…私が思ってる以上にタフですね」
そのステインに自分が攻撃されたと言うのに―
「あれ？ステイン居ないよ？帰っちゃった？殺しちゃった？どっちにしろ勿体なかったねー」
キョロキョロと部屋を見渡す王子が目についたのは弔だけ、何やら先生と話をしている様だ。
「彼は我々敵連合と共同歩調を取ると約束して頂けました。この場に居ないのは成すべき事の為にと保須市に戻りましたよ」
よく分からず首を傾げている王子にもう少し噛み砕いて説明しようかと思い―
「やっとお目覚めかクソガキ、いざって時に使えねぇなお前の個性は……そうだ」
話を終えた弔が二人の前までやってくる。
「黒霧、コイツの社会勉強とやらはどうなんだ？やれるのか？」
「…都市部での行動はこれが初めてになりますが彼なら問題ないでしょう」
頭上での会話に追いつけず呆けた顔で二人を見ている王子。
「そうか…行くぞ保須市に」
弔の声に合わせて黒霧のワープゲートが二人を覆う。

薄暗いＢＡＲから暮れなずむ外へと急に連れ出され目を瞬せる王子。
何処かのビルの上だろうか、風が強く吹いていた。
「星野王子…これまでにあらゆる場所へと赴き、貴方の興味を伸ばす様に仕向けて来ました」

黒霧が未だに座り込んでいる王子を立たせ、目線を合わせる様に立ち膝で屈む。
「今までのが勉強としたらこれは試験です…期待していますよ」
「試験だテストだなんてかたっ苦しい事はねえよ」
いつの間にか弔が隣に立ち、眼下の街並みを眺めていた。
「ステイン…あのムカツク先輩がこの街にいる。そこでだクソガキ、俺達とあのヒーロー殺しと大暴れ競争だ」
二人の言葉に王子は自分が何をすべきか理解する…そしてそれはずっと願っていた事でもあった。
「やっと街中のみんなと一緒になれるんだね！僕頑張るよ！」

◇◇◇

保須市にある商店街は大変な混雑となっていた。
閉店時間のタイムセールが始まり、それに合わせ買い求める客や帰宅途中の人々。
それだけではない、近くに敵が現れた。と町内放送で避難勧告されていた。
野次馬に向かおうとする者や巻き込まれない様にさっさと買い物を済まそうとする者でごった返している。
そんな騒動に近い状態の中、一人の子供が八百屋に現れる。
「らっしゃい！」
八百屋と書かれた前掛けをつけた個性”熊”の異形である店主が出迎える。
もう夕方も過ぎて暗くなってきた、子供一人に買い物させるには遅い時間だ。
「おや？坊っちゃん一人かい。親御さんは一緒じゃないのかい？」
「いつもは一緒に居るんだけどね！今日は試験とか何かで一人なんだ！そーいや敵が出てるとか言ってたけど、お店やってるの？」
「敵が怖くて商売出来るかってんだ！周りの店の連中もそう思ってる筈だぜ！それに今日はヒーローがやけにうろついてやがるからな！」

平和呆けとも取れる楽観視。ヒーロー飽和社会だから起こってしまったとも言える危機感の欠如…それが今の日本に蔓延している。
「良かったー！最初どうしようかなって思ってたんだ、他のお店も開いてるなら次は本屋さんに行こうかな？教えてくれてありがとー！」
ニコニコと笑顔を向けてくる子供に気を良くして、つられて笑顔で対応する。
「そんなに色々買い物あるのかい坊っちゃん？お使い大変だねえ…さて何をお包みしやしょうか！」
店主と子供の間の空間に歪なボールが現れた。
「ここにあるのぜーんぶ下さい！」
そのボールを投げつけ、ぶつかり、転がって店内のあらゆる物を一つにして行く。
小さい子供の突然の蛮行に店主は呆気にとられ、行動が遅れる。
「ありがとね熊おじさん！後でまた来るね！」
店先に陳列してあった野菜やダンボールに入ったままの物も全て持っていかれてしまった。
「な、なんだあのガキ！泥棒だったのか!?待ちやがれ！」
慌てて店先へと飛び出す店主、人通りの多い往来で野菜の塊を転がしている子供は目立つ。
子供を止めようとするが人混みで追いつけない。それどころか周りから敵か!?等と声が上がってしまう。
「違ぇよ！万引だよ万引！野菜をうちの店から盗んでいった子供がいんだよ！」
指差した方向には既に子供は居なくなっていた。
悲鳴が聞こえ、そちらに目を向けると本屋のおかみさんが客と共に血相を変えて店から出てきた。
確かあの子供は後で本屋にも行くとか言って…
「誰かヒーローを呼んでおくれ！」
慌てふためいた様子に通行人も怪訝な顔で眺めている。
「本屋の！もしかして野菜持った子供の仕業か!?」
「熊田さん！アンタん所の野菜だったのかい!?ってそれどころじゃな

いよ通報しなきゃ！」
八百屋がへたり込んでいるおかみさんに近づき確認する、やはりあの子供の様だ。
「あの万引小僧め！とっちめてやる！」
個性故に腕力に自信があった八百屋の店主が毛を逆立たせながら本屋の入り口を潜り―
本の塊とぶつかる。
あまりの衝撃に弾き飛ばされてしまい、複数の通行人にぶつかりながら止まる。
何とか立ち上がろうとした時、目の前の塊から声が聞こえる。
「あれー？まだダメだったかな？もう一回試してみよ、何度でもチャレンジ！」
聞こえるや否や塊がこちらに向かって転がってくる。這這の体で回避しようとするが、ぶつけられまた弾き飛ばされてしまう。
「あー熊おじさん大きいからかー！でも他の人はいけたし、もう少しだよね！」
今度は建物の外壁にぶつかる。何とか体勢を立て直し、目を白黒させながら周囲を確認すると…悍ましい物が見えた。
本の塊に先程ぶつかってしまった通行人がくっついている…その人々から耳を劈くような悲鳴や助けを求める声が聞こえる。
「な、何なんだよこれは…こんな個性聞いた事もねえぞ…」
そのあまりにも悍ましい光景、助けを求める声と少年の明るい声の相異にすっかり腑抜けになってしまい、逃げ出す事も出来なくなる。
「さあ熊おじさんも一緒に行こうよ！パーティーが始まるのさ！」

一度転がりだしたボールを阻むものなく、まさに順風満帆。
商店街にあるもの全てを固めてそのサイズは６ｍに迫る。
とりわけて商店街の人たちを一緒に固める事が出来た。王子にとってそれは大事な事だった。
「仲良しはいつも一緒にいたいよね！僕も仲良しになりたいし！」

固まってる人たちにそう明るく話しかけながら塊を転がし、聞こえてくる怨嗟の声は何処吹く風と聞き流す。
次は何処行こうかなと考えながら大通りへと差し掛かる。
サイレンを鳴らし急行している緊急車両の列が王子の前を通る、その先では大きな火災が起こってるようだ。
「そーいや脳無くんも一緒に来てるんだっけ？それともステイン？」
視線の先で爆発が起こる…どちらが居るにせよ派手にやっている事は確かな様だ。
「あっちに行ってみようかな？試験って何すればいいんだろ？」

◇◇◇

「チッ、なんだ…やるじゃないかご老人」
エンデヴァーは暴れていた敵を一撃で地面に沈めた見知らぬ老人ヒーロー…グラントリノに対して評価を下した。
隣の区画から爆発音と共に悲鳴や怒号が聞こえる。
「あっちはヒーローが集中していたハズだが…」
「早くこいつの拘束、身柄引き渡しを済ませて加勢に行くぞ」
戦いが始まる前の事を思い出すエンデヴァー。
息子(焦凍)が明後日の方向に踵を返し、去り際に残した言葉が引っかかる…
「そいつは…うちのサイドキックに任せろ。ご老人は今から言うアドレスへ向かってくれ」
グラントリノは訝しみながらも耳を傾ける。
「加勢はこのエンデヴァー一人で事足りる」

老人と別れ、未だ黒煙が立ち上る現場に到着したエンデヴァー。
黒い肌と剥き出しの脳を持つ大柄な敵と翼を持ち自由に空を飛ぶ同じく剥き出しの脳を持つ敵を見定める。
「エンデヴァー！自在に空を飛び鉤爪で襲ってくる敵が一人！あの黒い敵は増強系と硬化系の個性を持っています！どちらとも近接戦闘は危険です！」

既に戦っているサイドキックの一人が情報共有すべく声を掛ける。
「ならば相性の悪いヒーローは別の場所へ応援に行け！ここは俺が受け持つ！」
応援先の住所を聞き、素早く行動するヒーロー達とすれ違いながら巨躯の敵へ対峙する。
新たに現れたヒーローにその大きな身体に似つかわしくない素早さで襲いかかるが―
「ふん！その程度で増強を名乗るか、スピードがその程度ならば力も底が知れるな！」
猛烈な炎を真正面から浴び前に進めなくなってしまうが、倒れる事はなかった。
「それと硬化か、しかし動きが止まってしまうのならばザコ個性よ！」
両腕から噴き出す火力が増す。付近の建物に被害が出てしまう程だ。
「もう一匹居るのでな！時間を取られる訳にはいかんのだ！」
上空でヒーローと戦ってる敵を見て、次に打つ手を考えつつ更に火力を上げる。
体力の限界か、それとも酸欠か…炎の中の敵が地に伏せた。

「手荒になってしまったな、次は飛んでる奴か…ん？」
空を見上げた時に”それ”に気付いた。
低層のビルの背後で蠢く巨大な何か。
黒煙によって全体像は掴めないがゆっくりとこちらに向かって来ている様だ。
”それ”が近づいて来るにつれ、声が聞こえてくる。
ヒーローに助けを求める声の様だ…避難は完了しているのではないのか？
「貴様ら！市民の避難誘導終わっていなかったのか!?」
声を張り上げ、周りにいるヒーローやサイドキックを怒鳴りつけるエンデヴァー。
その声に答えたのはヒーローではなく、まだ声変わりもしていない

であろう少年の声が響く。
「えっとね、避難誘導？してる方から来たんだ。みんないっぱい居たからね！」
まもなくして”それ”がビルの影から姿を現した。
火災によって照らし映されたシルエットは球状。表面には乗用車やガードレール…それと人がそのままの姿で張り付いている。
「なんだ…これは」
目測で１５ｍはあろうかと試算する。
張り付いた市民の一人がエンデヴァーが来た！と声を上げるとその塊から異口同音に救いを求めるエンデヴァーコールが始まる。
かなりの数の市民が巻き込まれているようだ、迂闊に炎を使う事が出来ないと悟ると通信を行う。
「巨大な球体の敵が現れ多数の人質を取っている。サイドキック達は周囲に潜み情報を探れ！俺は…時間を稼ぐ」
髪や髭、肩から噴き出す炎の勢いを強めながら塊へと歩を進める。
上空で戦ってるヒーローはまだ耐えるだろう。このサイズの敵を後回しにする訳には―そう考えていると先程の少年の声が聞こえてくる。
「エンデヴァーが居るの!?えーなんで？住んでる所って違う場所じゃなかった？レアだね！」
塊が止まる。この少年の声がこの個性の持ち主なのだろう…何処からか見ている様だ。
こちらに興味を示しているのならばサイドキック達の移動時間を稼ぐのは容易だろう。
「そこの球体に告げる！この俺がエンデヴァーだと知って抵抗するのか？さっさと個性を止めないと火傷ではすまんぞ！」
「夜だと凄い目立つねエンデヴァー！凄いな！欲しいな！燃えてるしお星さまって言うより太陽かな！」
一切会話が噛み合わず要領の得ない。
（何を言ってるのだこの敵は…薬で我を忘れてるのか？ただの気狂い

か？）
　サイドキック達の展開はまだ完了していない…まだ時間を稼がねばならない。
「貴様の目的はなんだ!?球体に巻き込まれた市民を解放しろ！」
「そーいやエンデヴァーってサインとか書かないんだよね？本物鑑定団で全部偽物扱いされてたよねサイン！サイン書いてよ！」
　突拍子も無い要求に面食らうエンデヴァーとサイドキック達。
「僕の周りに居る…近いのは包帯みたいなマスクしてる人かな？近くのビルに文房具コーナーがあるから色紙持ってきて！」
　周囲を取り囲みつつあるサイドキックの一人を名指ししてヒーロー達を驚かせる。それ所か付近の建物の中まで見えているようだ。
「エンデヴァーどうしますか？」
　指名されたサイドキック、キドウが通信で指示を仰ぐ。
「相手の個性は未知数で人質も居る。こちらの行動は見られているようだが構わんさっさと包囲しろ…キドウ、時間を稼ぐ為だ持ってこい」
　その一人が包囲網から抜け出しビルへと入る。
「再度聞く、貴様の目的はなんだ!?俺のサインが欲しいが為にこんな騒動を起こしたとでもいうのか!?」
「エンデヴァーが居るなんて知らなかったよ？目的はなんだっけ？なんかステインがどうこう言ってたのは覚えてるよ」
　初めてまともに会話が成立した…そしてその会話は内容の多いものであった。
（ステイン！やはりあのヒーロー殺しはこの街に潜んでいたか…言ってたとの発言を鑑みるにこの敵は誰かしらの指示に従っている。ステインは単独犯であるというプロファイリングがある…敵の第三勢力？）
　思索しているエンデヴァーに通信が入る。
「こちらバーニン！球体の背後に子供らしき人物を発見！球体に手を置いてる所から見るにこの個性の持ち主かと！」
「遠隔操作ではなかったか…俺が隙をつくる。確保の際はあの塊には

触れるなよ」
　そうこうしていると色紙を持ってキドウがやってきた…わざわざサイン用の太いペンまで持ってきていた。
「店の人が居ないので領収書はありません、料金はレジの脇に一筆添えて置いてきました」
「…この状況でよく軽口を叩けるな貴様」
　色紙を受け取り、塊へと向き合うエンデヴァー。
「要求通りサインを書いてやろう！なんと宛名を書けばいい!?貴様の名を名乗れ！」
「ほんと!?プリンスって書いて！でも名前の入ったサインってレアじゃなくなるんだっけ？」
　名前を聞き出す事は出来たがあだ名か何かかも知れない、使えそうにはないか…そう考えながら慣れない手付きでサインを書いていく。
　出来上がったそれはサインではなく署名に近い、簡素なものだった。
「クソ、なんでこんな物を俺が…出来たぞ！くれてやるから受け取りに来い！」
　サイン色紙を掲げこちらに来る様に促す、周囲のサイドキックがその隙を狙うが―
　塊がエンデヴァーに向かって動き出した。
　咄嗟に確保に動いたバーニンだったが、背中に目がついてるかの様に避けられてしまう。
「ありがとエンデヴァー！色紙も本人もどっちも貰うね！」
「貴様っ！全て茶番だったか!?」
　加速のついた塊を辛うじて横に回避し、すれ違いざまに背後に居るであろう敵に火炎を飛ばす。
　しかしそこには報告にあった子供がおらず…いつの間にか塊の天辺に居た。
「あっつい！エンデヴァーの炎凄いなー！でもこんなに熱いと固めるの大変そうだなー」
　自分の居た位置が轟々と燃えている様を見てどうしようかと思案

する王子。
「動き出したのなら仕方あるまい！逃がす訳にはいかんのだ！」
エンデヴァーの腕が、身体が、赤く燃え上がる。
ビルにぶつかり動きを止めた塊へ…ではなく周囲を燃やす。
そして逃さんとばかりに自身が火柱となるかのように火力を上げていく。
「酸欠で意識を刈り取り、その後捕縛する！市民への被害を最小限にするにはこれしかないっ！」
出来うる限り熱は与えない様に間合いを図って炎を噴き出し続ける…身体に熱がこもり始めるがここで止める訳にはいかない。

炎に照らされ、日中とも言える程の明るさに王子は立ち眩みする。
「眩しいしあっつい！流石だよねエンデヴァー！ぶつかれば固められそうだけど火傷するのはやだなー…もういいや、この辺にして星にして―」
そう口にしてふと気がつく…自分はどうやって星にしてきたのだろうか？
いや、今までも星にした事なんて一回もなかった。
この瞬間まで出来るものだと、やれるものだと思っていたのだが…出来ない。
何か足りないのか？
やり方があるのか？
燃え盛る炎を見つめ、自問自答するが答えは出ずにいる。
暑さも感じず汗も出てない事に気がつくが、それどころではない。
何故出来ない？
薄れゆく意識の最中でもその事ばかりが脳裏をよぎる―
「バイタルサイン低下を確認…ここまでの様ですね、帰りますよ王子」

現れた黒霧が意識を失う瞬間の王子をワープゲートで救い出す。

◇◇◇

「帰ろ」

ステインの動向を見ていた弔だが、双眼鏡を崩壊させながらそう呟く。

「満足いく結果は得られましたか？死柄木弔」

ワープゲートを開きながら感想を聞く黒霧。

「それは明日次第…俺も少し認識を改めないとな」

その視線の先は今もなお救助作業が続く瓦礫の山―王子の足跡。

Ｎｏ．５

蛇腔総合病院
その病院には秘密がある。
院内にある霊安室に隠された秘密の通路のその先…公には出来ない研究室。
モニターや機械類の点滅灯で照らされた薄暗い室内、床には足の踏み場もない程のケーブルやチューブで埋め尽くされている。
そして部屋の大半を占める透明な円筒形…脳無を収容する為のカプセルが所狭しと建ち並ぶ。
諸悪の根源ともいえる一室で二人の人物がストレッチャーに寝かされている王子を診察している。
「どうかなドクター？彼の症状は」
「体内に埋め込んだセンサーから分かっておったが、所謂熱射病と言った所かの。子供がなりやすい症状ではあるが…」
ため息混じりに聴診器を外し、適切な処置を施していく。
「ＡＦＯよ、王子（これ）はまだ改造せんのかのう？この程度で動けなくなるのは不便ではないかの？」
「ドクター、彼はまだまだ成長期だよ？僕らが勝手に成長させるよりもっと良くなるかも知れないじゃないか」
寝ている王子の頭を撫でながら瞳のない顔で彼を見る。
「エンデヴァーの個性…外的要因でやられてしまったのなら、そこはコスチュームで補ってあげよう」
「こやつを脳無（ハイエンド）にでも出来ればグッと楽になるのじゃが…個性の方もろくに分かっとらんし面倒極まりないわい」
処置を終えたドクターが王子のカルテにいくつか書き足していく。
「好きとか愛だとかそんなふわふわとしたもんが個性に反映されるとはのう…科学の敗北じゃよ全く」
「なら彼の個性は科学にも勝てるって事さ。それに今回の彼の働きで少しだけ個性の使い方…固めるやり方を学べたよ」
「ワシには愛なんて自分の研究ぐらいじゃ…しかし、そんなにこの個

性に固執するとはのう？」
　ＡＦＯが後進を育てると決めてからと言うもの、全ては死柄木弔（マスタピース）の為に動いていたが…王子との出会いでＡＦＯは少し計画に変更を加えていた。
「弔は覇道を歩む事になるが…覇道というものは障害が多く、また険しいものだからね。彼の個性でその道を整地して貰えたらなと思ってるだけだよ」
　大きな障害になるであろうオールマイト…あれが固まった時の時の事を思い出して不敵に笑うＡＦＯ。
「王子の個性”核（コア）”の複製を頼むよドクター、もしかしたら脳無でも使えるかも知れない」
「もっと利便性のある個性のが良いと思うんじゃが…ＡＦＯが必要と決めたのならやるまでじゃ」
　颯爽と王子の体組織を採取して行動に移すドクター。

　ドクターが居なくなり、二人きりとなったＡＦＯは未だ眠り続けている王子へと優しく問いかける。
「初めて出会った時に言っていたね”星”にしたいと…でも君の個性ではそれが出来ないのになんでそう思ったんだい？」
　エンデヴァーを前にして戦うではなく逃げる事を選び、星にしようとして—失敗した。
「僕でさえ…自分でさえ知らない力がまだ君にはあるのかな？」

◇◇◇

　大通りから一つ路地に入り、いくつもある雑居ビルの地下にそれはある。
　表向きは隠れ家的なＢＡＲの装いだが看板は出ていない…その店の名前は”敵連合”
　その小さな店内でいつもなら煩く騒ぎ立ててる王子だが、保須市から戻ってきてからと言うもの元気がない。

あの襲撃で王子や脳無は多大な被害を出したが、新聞の一面は全てステインに取られてしまった。
あの王子(クソガキ)がそんな事を思い悩む様な奴じゃないのは弔は理解していた。
じゃあ一体何を―
「弔、王子、昼食が出来ましたよ」
カウンターに居る黒霧が出来たてのプッタネスカをフライパンから取り分けてカウンターに置く。
「またパスタか…」
そう愚痴りながらフォークを突き立て食べ進める。
「弔が何でも食べて頂けるのでしたら色々とご用意致しますが」
この話を続けると食事中ずっとお小言になりそうだ、と思い顔を伏せる。
俯いた事で床で寝転んでいた王子がのそのそとカウンター席に座ってくるのが見えた。
「ありがと黒霧さん。いただきまーす」
いつもの様な覇気はないが食欲だけはあるようだ。
今までは特に気にした事もなかった弔だが、話を変える目的で聞く事にした。
「おいクソガキ、なんで俺は呼び捨てで黒霧はさん付けなんだよ」
口いっぱいにパスタを詰めていた王子が弔を見てきょとんとしている。
「黒霧さんは何処だって連れて行ってくれるし、ご飯も美味しいからね。弔はお酒を飲んでたり、お部屋でゲームやってたりでダメダメじゃない」
当然と言った口調で弔に言い放つ…それを聞いて沸々とした怒りが湧いてくる。
「…その程度の事で俺を呼び捨てにしていたのか？」
未だ本調子とは言えない王子にここで罵倒しても仕方ないだろう…一つ提案する。
「なら俺も何処か連れてってやる。そうしたら俺もさん付けにしろ」

「へーー！何処何処？お土産買えるか拾えるところがいいな！」
「まだ決めてねぇし、すぐに行くとも言ってないだろうが」
王子の予想以上の食いつきに少し仰け反る。

「何処がいいかな！黒霧さんじゃなくて弔だからね、遠い場所とか無理しないくていいよ？」
食事も終わり、今にも出掛けんばかりの様子に失言だったか…と弔が静観してると不意にＢＡＲのドアがノックされ、迎え入れる声を掛けるにドアが開かれる。
ラフなジャケット姿の上から特徴的なマフラーを首に巻き、髭をアンカースタイルに整えた丸サングラスの胡散臭い男―義欄。
裏の世界では名を馳せた大物ブローカー…そんな男が訪問してきた。
「おっと、これからお出かけでしたかね？入れ違いにならなくて良かったぜ」
タバコを吹かしながら中に入り、外に居る者に入る様に促す。
「こっちじゃ連日あんたらの話で持ちきりだぜ、何かでけえ事が始まるんじゃねえかって」
暗がりから店内に見知らぬ人物が二人入ってくる…
一人は男。
短くない髪を纏める事もなく散らかし、服装は上下ともダメージ加工でもされているのかボロボロで…何より目立つのは口元や目元などの皮膚の継ぎ接ぎ。
ポケットに突っ込まれた腕からも継ぎ接ぎが見て取れる。
「生で見ると…喜色悪ィなァ…それとあのガキが例の保須市の…」
一人は女。
前髪を眉毛の位置で切りそろえ、後ろは乱雑に纏められており至る所からほつれが出ている。
学生服の上から大きめのサマーセーターを羽織り、スカートはマイクロミニの位置…全体的にラフな格好だ。
笑顔で愛らしい顔立ちだが瞳孔は開いており、目元の隈はそういう

化粧ではなくナチュラル。
「うわぁ手の人と男の子！ステ様の仲間だよねえ!?ねえ!?私も入れてよ！敵連合！」
「……黒霧こいつらトバせ。俺の大嫌いなもんが更に増えるなんて耐えられない」
　やってきた二人を見る事すらなく黒霧に命令を出す。
「餓鬼と礼儀知らず…どっちも兼ね揃えたのが既に居るのに」
「まぁまぁ…せっかくご足労頂いたのですからお話だけでも伺いましょう死柄木弔…それにあの大物ブローカーからの紹介、戦力的に間違いはない筈です」
　王子の事だろうと察した黒霧は弔を宥め、義欄に話の続きを促す様に視線を向ける。
「紹介だけでも聞いときなよ…まずこちらの可愛い女子高生、名も顔もメディアが守ってくれちゃってるが連続失血死事件の容疑者として追われている」
「トガです！トガヒミコ！生きにくいです！生きやすい世の中になって欲しいものです！ステ様になりたいです！ステ様を殺したい！だから入れてよ弔くん！」
　終始笑顔で元気に答えるトガヒミコに対して訝しんだ目を向ける弔。
「意味がわからん、破綻者かよ…既に一人居るからこれ以上はいらない」
「なんでー？元気だし仲良くなりたいなー！僕は王子って言うの！よろしくねヒミコお姉ちゃん！」
「プリンスくんですか！かぁいい名前ですね！えへへーヒミコお姉ちゃん…良い響きです！」
　両手を繋ぎブンブンと振り回しながら握手をする二人を横目に義欄が続ける。
「まあこうして会話は一応成り立つ、きっと役に立つよ…次にこちらの彼、目立った罪は犯してないがヒーロー殺しの思想にえらく固執し

てる」
そう言って義欄がもう一人の方の背中を押して会話を促す。
「不安だな…こんなガキも居るし、この組織本当に大義はあるのか？まさかこのイカレ女入れるんじゃねえよな？」
弔の方を見ずに隣で踊るように握手を続ける王子とトガヒミコを見下しながら語りだす男。
「おいおい…その破綻ＪＫですら出来る事がお前は出来てない、まず名乗れ大人だろう」
周りの自分勝手な行動や言動に苛立ちが募る弔…言葉尻が少しづつ荒くなる。
「今は荼毘で通してる」
「通すな本名だ」
「出すべき時になったら出すさ…とにかくヒーロー殺しの意思は俺が全うする」
その台詞を聞き、堪え兼ねた弔がゆらりと席を立つ。
「聞いてない事は言わないでいいんだ…どいつもこいつもステインステインと…良くないな…気分が良くない」
「っ！いけません弔！」
次の行動を察した黒霧が個性を発動させる。
弔の、荼毘の、そしていつの間に踊りを止めてナイフを持ったトガの手がワープゲートによって散らされ、交差する。
「落ち着いて下さい、貴方の望むままを行うのなら組織の拡大は必須。奇しくも注目されてる今がその拡大のチャンス…排斥ではなく受容を、死柄木弔」
黒霧が姿を崩し霧となり弔の周囲を取り囲み耳打ちをする。
「利用しなければ全て…彼の遺した思想も全て…」
弔とて、その事は分かっていた…しかしまだ納得出来ていなかった。
「…うるさい」
苛立ちを隠そうともせずに店から出ていこうとする弔に道を譲る義欄。

「そういえばお出かけ前でしたね、何処へ？」
「うるさい！」
怒気を孕んだ声で威圧し足早に去っていく弔、追いかける王子。
「待ってよ弔！みんな置いてっちゃうの？行ってきます黒霧さん！」

◇◇◇

（くそぉ青山くんめ！別にそういうんと違うのに…！多分！）
みんなと一緒に木椰区ショッピングモール着いて行動の早いクラスメイトに置いていかれ―
麗日お茶子は緑谷出久と二人きりになってしまった時、ふと試験の時に言われた言葉を思い出してしまった。
「ムムム…動揺してつい全速力出してしまった」
（デクくんわけわからんだろなぁ…悪い事しちゃったな…うん…戻らんと…いや違うけど戻って謝るだけやし）
顔が熱くなってるのが分かる。走ったせいか、それとも私は本当に…
（うん…うんそう別に一緒にお買い物とかそういうんと違うもん…そもそも別に同じヒーロー志望としてスッゴイなってだけやしうん戻ろういや本当全然アレ違うし青山くんホンマちゃんちゃらおかしいわさーて戻る戻るぞ本当もう変な事言うんだから青山くん普段からの言動もおかしいからアレが素なんかな？）
踵を返しデクくんの居た方へ歩きだした時に…人通りの多い道の真ん中で右往左往して誰かを探してる子供が居た。
早く戻らんと…とも思うが迷子なら見過ごせない、ヒーローが困ってる子供を捨て置くなんて出来ない。
（デクくんもここに居たら助けてあげると思うし…ってちゃうねんちゃうねん）
脳内でツッコミを入れてくる青山を掻き消す様に顔の前で手をパ

タパタさせる。
（そんなんしとる場合ちゃう！はよ話しかけてあげないと…）

「どうしたのかな僕？迷子になっちゃった？」
キョロキョロと辺りを見回していた子供がその声の方に振り向く。
その子供は奇しくも今待たせているデクくんとよく似た癖っ毛で長さも似た感じだった。
（よう似とるなぁ…ちょっと色味薄めかな？デクくんも子供ん時はこんなんやったんやろな）
そんな事を考えてると頬が緩み、笑みがこぼれてしまう。
「お姉ちゃん誰？僕が迷子なんじゃなくて迷子を探してるんだ」
意地っ張りな発言をしてくる子供にすこし苦笑が交じる。
「そっかそっか、じゃあ一緒に探してあげようか？」
「いいの？ありがとー！あーでも知らない人にはついて行くなって言ってたよーな？」
腕を組んで悩んでる子供見て、しっかりしとるお子さんやな。と思いお茶子は身分を明かす事にした。
「おねーちゃんはね、麗日お茶子って言うんよ。雄英高校のヒーロー科なんよ」
子供の目線に合わすようにしゃがみこみ真正面からその子供を見据える。
雄英高校と聞いて俄然興味が湧いたのか、向日葵の種の様な瞳が輝きだした。
「雄英!?前テレビでやってたね！僕見てたよ！お姉ちゃん出てたの？大玉転がししした？」
予想以上の食いつきで掴みはＯＫ、と内心グッと拳を握る。
「大玉転がしはしてないよ。お姉ちゃんは走ったり戦ったりしとったよ…あとチアとか」
チアコスチュームで踊ってたのも放送されとるんやった…と恥ずかしくなってハハハと空笑いしながら視線を外す。

「あー！石いっぱい浮かせて負けた人！」
近くで顔を見たおかげか、トーナメントを思い出してくれた様だが…苦い思い出の一つだ。
「そ、そやね…覚えていてくれて嬉しいわ…ははは」
さっきとは違った意味で空笑いが出てしまうが、そんな事をお構いなしに子供が急接近してくる。
「お姉ちゃん凄い！良い個性だよね！どーやって浮かせてたの？どんな大きさでも飛ばせるの？重くても大丈夫？何処まで飛ばせるの？」
「待って待って！めっちゃ興味持ってくれんのは嬉しいけど！まずは迷子さん探さないと、ね？」
あまりの食いつきに当初の目的を忘れていそうだなと思い、諌めるお茶子。
ハッと思い出してからすぐに陰りのある顔になる。
「そいやそーだった…でももう無視しちゃってお茶子お姉ちゃんとお話してた方がいいかなーなんて思い始めてるよ」
その言葉や顔に何かあったんかな…と思い、柔らかそうな髪を撫でる。
「まぁまぁそう言わんと一緒に探してあげるから、ね？」
立ち上がって手を出すとすんなり握ってきてくれた。

（まずはインフォメーションに行ってアナウンス流して貰った方がええね）
そんな事を思いながら歩きだすお茶子だが、子供は不貞腐れた様に口を尖らせる。
「今日だってさ、何処か連れて行ってやるとか言っておいて一人でどっか行っちゃうんだよ？普段だってお酒飲んで自分も空き瓶とか片付けないのに僕が遊んでると片付けろーとかグチグチうるさいし…」
手を引かれながらずっと文句を垂れている…お茶子はその発言を聞いてステレオタイプの駄目なお父さん像が思い浮かび、乾いた笑いが出てしまう。

「あー…酷いパパさんなんやね？」
「弔はパパじゃないよ？黒霧さんのがパパだよ…ママかも？弔はヒモだよ」
「ヒモて！何でそんな言葉知っとるん！」
　最近のお子さんはマセてんな！とついツッコミを入れてしまったが…さっきの発言を反芻する。
「…今、弔とか黒霧って言わなかった？」
「言ったよ？それでね、今日だって新しい人が来てくれたのに気に食わないーとか言ってここに来たんだ。酷いよね！せっかく来てくれたのに歓迎会もしないんだよ」
　弔に対して文句を続けているこの子供はもしかして…
「そ、そういえばまだ君の名前知らないかな？」
　少し硬い笑顔になってしまった…何とか取り繕はねば。
　そんなお茶子の胸中に知らずに元気に返事をしてくれた。
「そーだっけ？忘れてたのならごめんなさい！僕は星野王子！よろしくねお茶子お姉ちゃん」
　屈託の無い笑顔を向けてくる王子だが…お茶子の心情は計り知れない程の衝撃を受ける。
　あの時のＵＳＪ襲撃事件…実行犯達がお互いに呼び合っていた名前。
　死柄木弔。
　黒霧。
　そして―王子（プリンス）。
　敵連合の王子といえば球体の個性の持ち主で…オールマイトを行動不能にしたとクラスメイトから聞いていた。
　つまりこの子は、こんな幼くしてヒーローを相手取る敵なのか。
　気がつくと足は止まり、王子に向けた硬い笑顔のままで固まっていた。
　不思議そうにこっちを上目遣いで覗き込んでくる王子。
（何か思惑があって近づいてきた？ううん、この出会いは偶然だし何より私から話しかけた）

お茶子は考えを巡らす…この子が敵連合の一人ならここで捕まえるべきだ、と。
（このままヒーローを呼んで…あかん！そんな事したら今でもこっち見とるしバレてまう…せや、クラスの誰かと会って私が相手してる間に連絡して貰おう）
心の内でそんな決意を固めていたお茶子だが…そんな葛藤などつゆ知らず王子はお茶子に具合が悪くなったの？と心配して声を掛けてくる。
「大丈夫大丈夫！ごめんね止まっちゃって？さ、行こうか」
（しかしこの子は私に対して警戒心が薄いんかな？今も私を心配してくれとるし…体育祭で負けたから弱く見られてる？いや、もしかして敵連合に騙されているだけなのでは？）
新聞やニュースはステインの事ばかりで保須市で起こった敵連合の行動はろくに報道されておらず、お茶子は目の前の子供が大量殺人犯だとは思いもよらなかった。
どちらにしろここで確保しないと、そう考えていたら王子が急に走り出した。
「ちょっ!?人の多い所で急に走り出したらあかんよ！」
そう言いつつもお茶子も走り出す、繋いだ手は離さない。

（敵連合の手掛かりを見逃す訳には…ッ！）
不意に王子が止まった…ショッピングモールの一階にいくつも配置されているベンチの一つに見慣れた緑髪の癖っ毛、緑谷出久が居た。
そういえば一人きりにさせてしまっていた事を思い出し、申し訳ない気持ちになるお茶子。
（それは後で謝ろっ！それよりデクくんと会えてよかったわ、デクくんならすぐに察してくれ―）
「やあっと見つけたよ弔ー！勝手にふらふらしたと思ったらこんな所で座り込んじゃってさ！」
王子の澄んだ声がお茶子の耳に入る…よく見るとデクくんの隣に

見知らぬ人が座っている。
　その人物は馴れ馴れしく肩を組んで首辺りを鷲掴みにしている…王子が言ったのが本当なら座っているのは死柄木弔であり、彼の個性は―
「麗日さん！大丈夫だから！」
　気丈にも冷や汗を流しながらお茶子を近寄らせまいとするデク。
「それはこっちの台詞だぞ…勝手に走り出したのはそっちだろうが」
　ため息混じりに悪態をつく弔…既に隣の人物は眼中に無いようだ。
「じゃあ行くわ…追ったりしてきたら分かるよな？」
　そう言い捨てて歩きだす弔。
　首を拘束され続けてまともに声が出ないデクがそれでも呼び止める。
「待て…死柄木…ＡＦＯは何が目的なんだ」
「…知らないな。それより気を付けとけな…次会う時は殺すと決めた時だろうから」
　雑踏に紛れながら振り返りもせずに返事をする弔。
「あれ？もう帰るの？まだお土産買ってないよ？」
「手に入れた…いや、最初から持ってたんだ…帰るぞ…王子（プリンス）」
　止まる事なく雑踏へと消えていく弔、そんな後ろ姿を目を丸くして見つめる。
「あれ？今名前で呼んだ？なんだやっと覚えたのかー！物覚え悪いんだからもー！」
　そんな事を言いながら破顔する王子。
　弔に追いつこうと走り出し―振り返って大きく腕を振る。
「バイバイお茶子お姉ちゃん！そうだ！今度大きな塊用意するからさ！お姉ちゃんの個性使ってよ！約束だよ！」

No．6

「なるほどね。自分と自分が殺し合う様を見て気が触れちまったと…」

とある寂れたＢＡＲの一室。

そこには二人の男―義欄と頭から紙袋を被った陰鬱な雰囲気の男しか居ない筈だが、話し声は三人の様にも聞こえる。

「で？その頭は？過呼吸か？」

紙袋の男に向かって義欄が問いかける。

「包んでないと裂けるんだ」「裂けやしねぇよ！」

紙袋の男が自分で言い放った言葉を即座に否定する。

「俺の出した分身はある程度ダメージを受けると消える。そうだな…成人男性だと大体骨折くらいのダメージだ、俺は不安なんだ」「安心するぜ」

彼が語った過去と今の発言で大凡ではあるが義欄は理解した…この男の性分を。

「自分たちで窃盗や強盗を重ね、指名手配と…使い方によっちゃ国を堕とせる個性だ…そんな奴が転落人生とはね」

煙草を懐から出し、愛用の拳銃型ライターで火をつける。

「終わった人間はどうしたらいい」

前も見えない紙袋が今の彼を表しているのか、先の見えない現状を嘆く様に尋ねる。

「信頼される事だ」

煙草を吹かしながら事も無げに言い放つ義欄。

「誰に」

自分でさえ信頼出来ないのに一体誰から信頼される様になると言うのか…そう思っていた。

「仲間にさ…近頃元気な集団が居てな、お前なら必ず必要とされる。大丈夫だ似たような人間は案外沢山居るし、それに―」

煙草のケースを差し出し、紙袋の男に分け与える。

「お前だけじゃないんだぜ、国を傾ける個性なんざ…そこら辺に転

がってるもんさ」

「彼は分倍河原仁。下り坂を転がり落ちてる真っ只中のイカした男さ。彼の個性”二倍”はこれからを見据えるなら重宝すると思うぜ？」

敵連合のＢＡＲに顔を出した義欄が隣りにいる防寒用のフルフェイスマスクを紹介する。

「で？顔を隠したままのご挨拶か？醜いとか怪我を晒したくないとかなら、俺達は気にしない」

素顔のままの弔が部屋の隅で斜に構えた態度で見ている荼毘を一瞥してマスクを脱ぐ様に促す。

「ずっと素顔ってのは一身上の都合で無理！」「問題ないぜ！」

ほんの少しだがマスクを脱ぎ、顔を晒す。

「俺は分倍河原仁…トゥワイスだ！よろしく頼む！」「頼んじゃいねーよ！」

短く刈り込まれた金髪は逆立ち、額に傷はあるものの精悍な顔立ちである。

言い終わる前にマスクをつけ、大きく息を吐く。

「あー…別につけっぱなしでも問題はない、一度顔を見たかっただけだ」

察した弔がこれ以上彼の素顔を…精神的な問題を詮索するのを止めた。

「僕は王子！マスクかっこいいね！それってコスチューム？僕のもそろそろ届くって先生が言っててね楽しみなんだ！」

馴れ馴れしく近寄り、出してもいない手を勝手に握手しだす王子にたじろぐトゥワイス。

「なんだこの子供は?!」「宜しくな！」

「あー王子くん自分だけズルいです、私はトガヒミコって言います！」

「そうだ！歓迎会やろうよ！ヒミコお姉ちゃんと荼毘の時出来なかったし！」

弔と出掛けてから以前の様な明るさが帰ってきた王子。
それだけではない。弔にも大きな変化があり、黒霧としては順調に事が運んでいる状況は芳しく思う。
「王子、貴方は何かと理由を見つけてはパーティがしたいだけですね？」
そう一言添えると、はにかんだ笑顔で黒霧を上目遣いをする王子。
（敵連合ならやっていけるだろう…）
王子とトガヒミコがトゥワイスに詰め寄り、賑やかに自己紹介をしてる姿に義欄がかすかな笑みを浮かべる。
「何でもいいが手数料は頼むよ黒霧さん、トゥワイスだけじゃねえ…もっと色々と連れて来るからさ」
今ビッグネームと交渉中なんだ、と黒霧に語りかける—

◇◇◇

「やーっと来たにゃん」
のろのろと森から出てくる生徒達を見てピクシーボブが間延びした声で迎える。
山間にあるワイルド・ワイルド・プッシーキャッツのホーム、マタタビ荘の前で5人の男女が首を長くして生徒達の到着を待っていた。
「お昼抜くまでもなかったねえ」
朝の9時半から行われた抜き打ち訓練である魔獣の森踏破は既に午後の5時を過ぎ、太陽が山へと沈もうとしていた。
「何が三時間ですか…」「腹減った…死ぬ」
生徒である瀬呂範太と切島鋭児郎が口々に不平を鳴らす。
「悪いね、私達ならって意味なのアレ」
プッシーキャッツの一人、マンダレイが悪びれもせずに笑顔で言い放つ。
「実力差自慢の為か…」
肩で息をする砂藤力道がぼやくと一人のヒーローが生徒の前に出て仁王立ちになる。

「ま、私なら3時間どころか３０分も掛からないけどね！」
綺羅びやかな金髪、目元だけを覆うマスクと一体になった一対の角がその金髪から覗かせる。
身体のラインがくっきりと浮かび上がるピチピチの白のタイツの上から紫のコスチュームやブーツを身に着けた女性ヒーローＭｔ．レディがドヤ顔で決める。
「Ｍｔ．レディ！デビューからまだ2年も経ってないけど怒涛の活躍と熱烈なファンからの需要で人気が鰻登り！その個性”巨大化”は都市部では二車線以上の幅が必要だけど圧倒的な大きさで敵に立ち塞がる姿は頼もしさも相まってよく写真に撮られてネットを賑わしている！巨大な身体から繰り出す必殺技のキャニオンカノンが売りのビッグなヒーロー！」
疲れ果て、服も泥だらけになっている緑谷出久の顔が輝き、現れたヒーローをのべつ幕無しに説明をする。
その説明にクラスメイト達は慄いてる一人を除いていつもの事かと傍観している。
「あら？よく知ってるわね、君のような子がうちに職場体験（きて）くれれば良かったのに」
緑谷の説明に気を良くしたＭｔ．レディが更なるドヤ笑顔になって調子に乗る。
「違ぇよ緑谷…お前はあれの本性知らないだけだよ」
緑谷の後ろから峰田実がこそっと耳打ちするが、その姿をレディに見咎められ萎縮する。
「Ｍｔ．レディ、その辺で…全員バスから荷物を降ろせ、部屋に置いたら食堂にて夕食その後入浴で就寝だ。本格的なスタートは明日からだ、さァ早くしろ」
担任の相澤消太が場をとりなし移動を促す。
「ごめんなさいイレイザーヘッドさん、今は相澤センセの方が良いのかしら？」
「どちらでも結構です…ミッドナイトと確執があるのは知っていますが、根津校長直々の仕事として合理的に割り切って頂きたい」

踵を返し建物へと去っていく相澤。
「何だか面倒そうな性格ね…生徒の世話もしないとだし、コネの為とは言え雄英の仕事受けるんじゃなかったかなぁ」
緑谷がマンダレイの甥っ子に陰嚢を殴られ悶絶する姿をのんびりと眺めながらそんな感想を漏らす。

「雄英高校最高だわ！いやワイプシに感謝すべきかしらね？」
食事の前にＭｔ．レディが一人でマタタビ荘にある露天風呂を満喫していた。
「ホームに温泉を作るなんて贅沢よね…マンダレイもピクシーボブも肌綺麗だったし、私も戻って温泉付き事務所を開く…でも地元だとチャート上がらないだろうし…むむむ」
そう考えていると脱衣場から生徒達がやってくる。
「夕餉の席でお見かけをいたしませんでしたが先にお風呂を頂いていたのですね」
自分と同じか…いや、それ以上あるやも知れぬサイズの持ち主から声が掛かる、高校一年であの発育はまさに暴力。
他の生徒もそれを理解しているのか、視線の先がみな一緒だ。
「えぇとクリエティだっけ？まだ名前全員覚えてないのよ」
「はい！クリエティ…八百万百と申します。一線で活躍をなさってるＭｔ．レディさん…良かったらお話を聞かせて頂けませんか？」
ヒーロー名で呼ばれ嬉しかったのか、プリプリと全身で喜びをアピールしている…これがヒーローとなったら手強いライバルになりそうね、とレディは揺れる胸元を見て戦慄する。
身体を洗い、掛け湯を済ました女生徒達がレディを囲む様に温泉に入ってくる。
「若手の中でもガンガン活躍してるレディさん、とても尊敬してます。

良かったら人気のとり方とか教えて貰えます？」
耳たぶが個性でジャックになっている少女、耳郎響香が控えめに聞いてくる。
「人気ねえ…と、その前にあなた達が来たって事は―」
レディが男性用の露天風呂を隔てる壁に向かって声を張り上げる。
「グレープジュース！分かってんでしょうね⁉」
壁の向こうで盛大に誰かが転ぶ音が聞こえる…
「返事は！」「ハイ！」
間髪入れずに返事を返してくる峰田実（グレープジュース）に女生徒達がざわめく…
「人気のとり方より峰田の扱い方教えて貰えますか？」

◇◇◇

「なんで⁉なんでなのさ！意味分からないし先生も間が悪すぎだよ！」
敵連合のＢＡＲは今までとは違う賑わいを見せていた。
トゥワイスを始めとした、個性豊かな仲間がやってきた。
そして襲撃決行となり、各々の為に作られた専用のコスチュームが黒霧の手によって運ばれて来たのだ。
入りたての者にはただのガスマスクや拳銃等の既製品とも取れる物が、中にはただ顔を隠すだけの仮面しか渡されていない者もいた。
予てからコスチュームを熱望し、今か今かと待っていた王子についに専用のコスチュームが届いたのだ。
皆でのお出かけも楽しみにしていた―その矢先に。
「王子…盛り上がってる所心苦しいのですが、貴方は先生からの呼び出しがあって林間学校には行けませんよ」
円筒形の何かに抱きつき、喜びのあまり頬擦りしていた王子におずおずと黒霧が告げる。
最初は何を言っているか飲み込めず固まっていたが、少しづつ理解して…絶叫ともとれる発言へと繋がる。

「何でも新しい脳無の為に力を貸して欲しいとの事で…そこでトゥワイスの個性で王子を二倍にして頂き、コピーを襲撃に向かわせると相成りました」
　その言葉を聞き、勢いよく弔の方を振り向く王子。
「今回の襲撃はずっとお前に黒霧をつけさせる訳にはいかない…いざとなったら一人で逃げ切る事が出来るか？いや出来ない」
　王子が何か言いたそうな視線を無視してつらつらと述べる。
「何より先生の要請だ、良くして貰ったろ？たまには恩返ししてこい」
　先生、と言われるとぐうの音も出ない…コスチュームも今しがた貰ったばかりだ。
「採寸するから早くコスチューム着てくれ！」「ゆっくりでいいぜ！」
　腕に付いた巻き尺を伸ばしながらトゥワイスが囁す。

「裏のデザイナー・開発者が設計したにしては…だいぶ見た目に寄ってる気もするけどね、性能は大丈夫なのかな」
　支給されたガスマスクを被り、詰襟学生服姿の少年と言っても差し支えない人物―マスタードが自衛用の拳銃の感触を確かめながら王子を見ている。
「その長い筒は何なのさ？僕のボンベとは違うみたいだけど」
　王子が抱えてるライトグリーンの円筒を見ても何の用途のコスチュームなのか検討もつかない。
「これマスクなのさ！なんか色々機能がついてるみたいだけどそれは知らない！」
　マスクと言い放った異物を水平にして丁度真ん中にあった窪みに頭を突っ込ませる王子。
　抱きしめていた為よく見えていなかったが四角い顔と一本のアンテナがついていた。
　王子が頭を入れた途端にその顔が生きているかの様に動き出す。
　その瞳は瞬きし、喋る度に口が動く…かなりデフォルメされた顔だ。
「何だよその面白フェイスは！イカスぜ！」「クソダセェ！」

全身をピッチリとしたタイツで身を包んだトゥワイスが笑い転げる。
「ンだよ、俺なんかマントと仮面だけだぜ？それでいいからくれよ王子」
カウンターで酒を瓶のまま呷るように飲んでいた大男―血狂いマスキュラーが欲しくもないコスチュームを強請る。
「あげる訳ないじゃん！マスキュラーももっと早くお願いしておけばよかったのに、ちなみにどんなコスチュームがいいの？」
取られまいと残りのコスチュームも急いで身につけながら返事をする王子。
「あー…特に要望はねぇな？俺は義眼（コイツ）がありゃいいし」
私物である義眼のいくつかをポケットから出してカウンターに並べる。
「うわー綺麗な目がいっぱいだね！いいな！欲しいな！」
全てを身に着けた王子がカウンター席によじ登りマスキュラーの義眼を眺める。
「ハハハ！やらねぇよ！そのヘンテコマスクと交換とか言い出すなよ…うっわマスクもスゲェが服もスゲェなそれ」
その服はマスクと同じライトグリーンで前も後ろもなく、ボタンもジッパーすらない…つるんとした末広がりな寸胴鍋を思わせる。
腰から下は紫のレギンスで凄まじい色合いであった。
「良いなあ…王子くんのコスチューム可愛いです」
トガヒミコが自分用のコスチュームを見なかった事にしたいのか、収納ケースをそっと閉じながらため息を吐く。
「カワイイヤッター！」「え？可愛いのかこれ」
手早く採寸を終わらせたトゥワイスがジロジロと王子を眺める。
「何だいみんなしてさ！ヒミコお姉ちゃんだけだね！僕のセンスについてこられるのは！」
四角い顔の表情が怒った顔のようなものに表示を変える、おそらくマスクの中の表情と連動しているのだろう。
「そうだトゥワイス、試しに僕を出してみてよ！こーゆーのは第三者

の目っていうのが大事なんでしょ？」
「誰が見ても同じだっての！」「任せろ！」
即座に個性を発動させるトゥワイス。
腕から出た流動体が形を成し、色が付き…もう一人のコスチュームを着た王子が現れた。
「へー！これが僕！うーんコスチュームカッコいい！」
「もちろん僕だからね！僕もよく似合ってるよ！」
「えへへーありがとう！」
王子と王子がお互いに褒め合い、称え合う…そんな光景を見て、今まで沈黙していた荼毘が遂に口を開く。
「何だこれは？地獄か？トゥワイスお前の個性は地獄を作り出す能力か？」
辟易した顔でこの騒ぎを眺めていた弔が号令を出す。
「時間だ…開闢行動隊」
室内の空気が変わる。
「王子以外は派手な事はしなくていい…今回はあくまで狼煙だ、虚に塗れた英雄たちが地に堕ちる—その輝かしい未来の為のな」

◇◇◇

「あれぇおかしいなァ！優秀なハズのA組から赤点が五人も!?B組は一人だけだったのに!?おっかしいなァ!!」
部屋に入ってきたA組の面々を見て物間寧人が自身も補習の身ではあるが、スーサイド煽りを炸裂させる。
「ほんと面白いわこの子。あ、これA組の分ね」
プリントを今来た生徒達に配布しながら物間の精神性を素直に感心しているレディ。
「いやいや、あれは病気かなんかですよレディさん」
「昨日も全く同じ煽りしてたぞ…」
プリントを受け取りながら瀬呂と切島がレディの感想に噛み付く。
イレイザーヘッドとブラドキングが今日の補習の内容を相談して

いると―プッシーキャッツ・マンダレイの個性”テレパス”が全員の脳内に響く。
『皆！敵二名襲来！他にも複数いる可能性有り！動ける者は直ちに施設へ！会敵しても決して交戦せずに撤退を!!』
テレパスを受信し、Ｍｔ．レディを見るイレイザーヘッド。
だが彼女もまた動揺を隠せない様子…シロか？
「ブラドここを頼んだ、俺は生徒の保護に出る…Ｍｔ．レディは一緒に来てくれ！」
即座に走り出し屋外へと出たイレイザーヘッドが見た光景は…満天の星空を隠すような黒煙と燃え広がる火災。

「心配が先に立ったかイレイザーヘッド…邪魔はよしてくれよプロヒーロー、用があるのはお前らじゃない」
急に横から声をかけられ―青い火炎がイレイザーヘッドを飲み込むかの様に襲いくる。
咄嗟に2階の手摺に特殊合金を縫い込んだ布を絡ませ回避する。
「まァ…プロだもんな」
奇襲を躱されるのも当然、といった面持ちの荼毘が二発目の火炎を繰り出そうとして―
「出ねえよ」
手摺を利用して軒先で静止し、個性”抹消”を発動しながら荼毘へと襲いかかる。
空中で繰り出される捕縛からの打撃、そして抑え込みの流れる様な一連のアクションにレディは感心する。
(個性を消すだけの後方支援だと思ったら…やるじゃない、流石は雄英の先生って事ね)
遠くから何かしらを破砕する音が響く、それと同時に何人かの生徒達が現れイレイザーヘッドの気がそれてしまう。
一瞬の隙をつき逃げ出そうとする荼毘だが未だに拘束され個性で睨まれたままだ。
「流石に雄英の教師を務めるだけあるよ、なあヒーロー…」

拘束している布を引っ張ると…荼毘の身体が裂ける。
「生徒が大事か？守りきれるといいな…また会おうぜ」
身体が崩壊し大地へと崩れ落ちる。
（さっきの発火が個性じゃないのか!?）
困惑するイレイザーを横目に少し広くなってる玄関先へと躍り出るレディ。
「イレイザーヘッドさん！私が出ます！」
巨大化したレディがその上背で周囲を確認する。
見えるは火災と…火災とは違う煙、そして砕かれる崖…音の元凶はあれか。
「まず崖に向かい交戦してる敵を倒し、その後に破壊消火を！」
即座に駆け出すレディ。
彼女の本気の速度は時速２００ｋｍを優に超え、その巨体から生み出される風圧は周囲への被害が出る程だ。
「まだ生徒が何処に居るか分からん！森を移動する時は細心の注意を払うんだＭｔ．レディ！」
一歩毎に速度が増していくレディに向って大声で注意喚起をするイレイザーヘッド、何とか声が届き速度が緩まる。
「な、なんだよあの女…映えしか気にしないんじゃないのかよ」
職場体験に行った峰田が彼女の即断即決を見て、普段とは違いすぎる雰囲気に恐れをなす。
「若いとは言え彼女もプロヒーローだ、成すべき事は分かってる…性格に難ありだがな」
火災に向って走り出すイレイザーヘッド。
「お前らは中に入ってブラドの指示に従え、すぐに戻る」

◇◇◇

（やっぱり交戦していた！）
拳だけでいくつもクレーターを作り出している敵…あの緑髪は確かデク、マンダレイの甥の洸汰くんを背負って逃げ回っている。

速度を上げて更に近づく、不自然に両腕が垂れ下がり身体中に怪我負っている…それでもやれる事をやろうとする姿勢は流石雄英の生徒だ。
「人命救助が最優先！よくやったわデク！」
敵の意識をこちらに向ける為に叫ぶ、その巨体から発せられる声に木々が揺れる。
「なんだ!?ありゃあ…プロヒーローじゃねえか！ホント何処にでも現れやがるなヒーローって奴ァよ！」
大男の敵がこちらを意識した、思惑通りだ。
「知ってるぜテメェ！Ｍｔ．レディだな!?俺と同じで色々ぶっ壊してるヒーローさんよォ！」
筋繊維が身体を覆う様に肥大化していく、あの個性は手配書にあった血狂いマスキュラー！
「一緒にされても困るわね！アンタがマスキュラーならぶっ飛ばしてビルボードを駆け上がる階段にしてやるわ！」
「ほざけ！そんだけデカいならさぞかし血が流れてるんだよな！血ィ見せろや！」
更に加速し飛び上がる―
「キャニオンカノン！」
今までとは比べ物にならない程の破壊音、崖が峡谷（キャニオン）へと変わる。
「ワイプシの私有地とか言ってたわね…国有地じゃなくて良かったわほんと」
土地の心配をしてしまう程の威力が出てしまった、やはり広くて走れる環境のが―
「破壊力はあるが…思った通りデカいだけだな、動きがなっちゃいねぇよ」
壊れた崖の上から声が掛かる、そこには無傷のマスキュラーがこちらを見下ろしていた。
「個性におんぶにだっこってか?そんだけデカいと誰も抱っこ出来ないだろうけどよ！」
嘲笑いながら筋肉を肥大化させていく。

「悪いがこちらは速さもあるんだよ！」
崖から飛び出しこちらの顔を狙ってくるが―
「バッカじゃないの？個性におんぶにだっこ？当然じゃない今日日格闘技なんて流行らないわよ」
個性解除、その瞬間身体は普段の１６２ｃｍまで縮小する。
「速さがご自慢らしいけど飛んだらダメでしょ、自由に飛べる個性でもないのに」
拳を突き上げる様に構え、タイミングを図り―個性を使う。
２０６２ｃｍのサイズまで膨れ上がる身体、そして拳がマスキュラーの身体に突き刺さる。
そして上空に吹き飛んでいくマスキュラーをジャンプして掴み、地面に叩きつける。
「それにしても顔狙うなんてサイテーね、大事な商売道具なのよ！」

土埃がはれ、筋肉達磨だったマスキュラーが人の形で横たわっている。
身動き一つしないその姿にデクは違う意味の心配をしてしまう。
「この程度で死ぬほど軟じゃないわ…無事でもないでしょうけどね、拘束する物持ってない？」
巨大化を解いたレディがデクの側に寄ってくる。
「す、す、すいません持ってないです！た、助けて頂きありがとうございます！」
慌てて頭を下げてお礼を言うが、負傷した両手も垂れ下がってしまう。
よく見ると腕だけじゃない、裂傷や打撲など身体の至る所が傷つけられている。
「…身体を張って洸汰くんを守ったんだから、もっとシャンとしなさい」
そう言って顔を上げるよう促すレディ。
「私達はヒーローなのよ？どんな時でも映える様にしなきゃ」

ウィンクしながら決めポーズを取るレディ。
この日、二人のヒーローが出水洸汰の心を打った。

◇◇◇

同時刻
「本当に彼らのみで大丈夫でしょうか？」
王子をＡＦＯの元へと送り届けた黒霧がカウンター席に座って一枚の写真を見ている弔に話掛ける。
「俺の出る幕じゃない、ゲームが変わったんだ」
黒霧の方へと向き直し、言葉を続ける。
「今まではＲＰＧでさ、装備だけ万端でレベル１のままラスボスに挑んでいた…やるべきはＳＬＧだったんだよ。俺はプレイヤーであるべきで使えるコマを使って格上を切り崩していく…王子はさしずめマップ兵器かな」
近づいてくる黒霧に身振り手振りを交えて語りだす。
「その為にはまず超人社会にヒビを入れる。開闢行動隊の奴等は成功しても失敗してもいい…そこに来たって事実がヒーローを脅かす」
「捨てゴマですか…」
弔の発言に黒霧が相槌を打つ。
「バカ言え！俺がそんな薄情者に見えるか？奴等の強さは本物だよ。向いてる方向はバラバラだが頼れる仲間さ…ルールで雁字搦めの社会、抑圧されてんのはこっちだけじゃない」
黒霧から視線を外し、手元の写真を見やる—そこには体育祭で一位を取ったにも関わらず拘束され、口枷まで付けられた爆豪勝己の姿があった。
「彼らの成功を願っているよ」

Ｎｏ．７

「良かった！イレイザーヘッドさん！ちょっと待って！」

火災が広がりつつある森へと駆けるイレイザーヘッド。

呼び止める声が頭上から聞こえる…上を向くと木々の合間から個性によって巨大化したＭｔ．レディが姿を表す。

その大きな手は片方は優しく包むように、もう片方は握りしめて誰かを輸送している様だ。

「怪我人と民間人の保護、それと敵の拘束をその首の布でちゃちゃっとお願いします」

怪我人…その姿を見てイレイザーヘッドの険しい顔がより一層険しくなる、緑谷出久だ。

「おい…」

「先生大変なんです！敵の目的はたぶん―いえ、明確に僕ら生徒を狙っています！それだけじゃなくって！とりあえず僕マンダレイに伝えなきゃいけない事があって…洸汰くんをお願いします！水の個性を持ってます！守ってあげて下さい！」

「おいって…落ち着け、こんな状況だからこそ頭を冷やせ」

レディから降ろされ、今にも駆け出しそうなデクを窘める。

「戦闘と怪我とでハイになってるな？…洸汰くんと敵は預かるがお前も来い、その怪我では足手まといだ」

「まだ動けます！僕は―」

「それ以上何か言うのなら除籍処分とする…自身を顧みろ、何が出来ると言うんだ？」

食い下がるデクに冷徹に言い放つ。

「合理的じゃない、伝える事があるのなら…Ｍｔ．レディ頼めるか？」

マスキュラーを握ったままのレディへと視線を向ける―

「ほ、本気ですか！・まだ仮免も取ってないんですよね⁉」
「やむを得ないだろう生存率の話だ。それに既に緑谷が戦闘をしてしまってる、後で処分を受けるのは俺だけでいい」
　伝言の内容にレディは狼狽する、生徒に戦闘を許可するなんて余りにも突拍子もない話だ。

「ここで議論するだけ時間の無駄だ、合理的じゃない」
　もう話す事はないとばかりに拘束した敵を引きずり施設へと歩きだすイレイザーヘッド。
「Ｍｔ．レディ！・マンダレイは洸汰くんの居場所が分からずに心配してました、無事を伝えて下さい！・それと敵が言ってました、狙いはかっちゃん…爆豪勝己と！」
　自分の怪我も顧みずに必死に頼み込むデク、その横で心配そうに見ている洸汰。
　そんな二人を励ますようにウィンクしながら軽口を叩く。
「こんな状況じゃワイプシも損害請求はしてこないだろうし、派手にやっちゃうから！」

◇◇◇

「あーんもう近い！・アイテム拾わせて!!」
（此奴…我のキャットコンバットを読んだ動きを…ッ！）
　敵連合のマグネとプッシーキャッツの虎が激しい拳の応酬を繰り広げる。
　互いに肉体派であり、オカマとオナベ…負ける訳にはいかない戦いがここにある。

　そしてすぐ側でもう一つ戦いが行われている。
　スピナーとマンダレイ…こちらの戦いは打って変わって消極的だ。

スピナーが数多の刃物が一つとなったスーパーナイフソードを振るい、マンダレイがそれを避ける。
個性テレパスで何度か意識を逸らそうとするがその分だけ攻撃が激しくなっていく。
「全くしつこいわね！」
「しつこいのはお前だニセモノ！とっととシュクセーされちまえっ！」
大きく後ろへと跳躍するマンダレイ、それを好機とみてスピナーが得物を振って飛び掛かり―

マンダレイの頭上を大きな足が通り過ぎ、スーパーナイフソードを粉砕する。
「あっぶな！ベテランの先輩足蹴にする所だったわ」
軽口を叩きながらマンダレイを踏まない様に後方へと下がる。
「ピクシーボブなら心は１８歳って反論してる所ね、助かったわレディ！」
頼もしい新人の登場に余裕が出来、軽口を返す。
「マンダレイさん伝言がいくつかあるわ、まずは洸汰くんなんだけど―」

「さっきの派手な音はこの巨娘のせいね!?マスキュラーったら負けるだけじゃなくて情報まで漏らしちゃって！ダメな男、世話が焼けちゃうわ！でもダメンズも嫌いじゃないわよ！」
虎の攻撃をいなし、素早くスピナーの側へと駆け出す。
「スピナー！この場で男がアナタしか居ないの、使わせて貰うわね！」
言うが早いがマグネの個性”磁力”をスピナーに付与する。
「な、何をするんだ!?マグネやめろ！」
その個性の範囲内の者は男がＳ極、女がＮ極の磁力を発する様になる。

「くっつけるのは何も王子ちゃんだけの専売特許って訳じゃないのよ！」
磁力で地中に含まれていた砂鉄がスピナーやマンダレイの身体に付着し始め、二人が磁力によってぶつかり合う。
「うぐぐ…！引き剥がせないっ！なんでこんな奴と抱き合わないといけないのよ！」
「離れろ不潔尻軽女め！マグネ！俺をどうしたいんだ!?」
「マンダレイさん敵と抱き合うなんて都会だったらキタコレですよ」
向かい合って抱き合う形で地面を転がる二人を茶化す。
「貴様っ！そのトカゲとは仲間ではないのか!?仲間を道具に使うとは何たる外道よ！」
すぐに助けに入りたいがマグネの磁力の強さは既に学習済み、それ故に近づく事が出来ないで居る。
「勿論仲間よ！だからこそ信じてるんじゃない、成し遂げてくれるって！」
じりじりと虎と間合いを取りながら、少しづつではあるがレディの方へと向かうマグネ。
「俺をトカゲと呼ぶんじゃない！俺はてめえら生臭ヒーローとメガネ君を粛清しなきゃいけねぇんだ！」
「意味分からない！それと耳元で怒鳴らないでくれない!?」
トカゲと呼ばれた事に激昂したスピナーがマンダレイと抱き合ったままに叫ぶ。
「入った、左に飛んでスピナー！」
半径４．５ｍ。それが彼女の個性の範囲、そしてその範囲の中にあるＭｔ．レディの両足へと磁力を付加する。
何の事か分からないが信じてると言われては飛ぶしかないと腹をくくるスピナー。
その瞬間マンダレイとの磁力が解け、自由になったスピナーが身体

をバネの様に弾ませる。
その跳躍はスピナーが思った以上の速度でＭｔ．レディの足元へと引き寄せられ―両足が閉じる。
「!?潰れる！」
迫る両足を見てしまい思わず目を閉じて身構える。
あわや潰される…と思われたスピナーへの磁力を解除し、今度は弾かれる様に足が開いていく。
「あー!?虎さん！避けて避けて！」
「ぬおおおおおっ!?」
磁力によって勝手に動き出した足にバランスを崩され、突然の事で個性解除が出来ずに虎を下敷きに倒れてしまう。
「やったわ！スピナー逃げるわよ早く立ちなさい！」
「に、逃げるのか!?俺はまだステインの意思を、彼の夢を―」
「気持ちは分かるけどあんな大きい相手私達じゃどうにもならないわ！殿に任せましょ！」
まだ立ち上がりきっていないスピナーのマフラーを掴み全速力で走り出すマグネ。
「っ待ちなさい！」
逃すまいと起き上がったマンダレイだが磁力を付与され倒れたレディと反発し、真横へと吹っ飛ぶ。
「そこはまだ範囲内よ！追撃は勘弁してあげるわ、チャオ！」
捨て台詞を残し、二人は森へと走り去る。

「虎さん！大丈夫ですか!?咄嗟に腕はついたんですが、その、胸が大きくて」
全身で潰す事だけは回避したものの、結局はその巨体故の胸で押しつぶしてしまった。
心配してそっと状態を起こしたが地面には虎は居なかった。
「うむ、大事無い。しかしレディ、受け身の一つぐらいは覚えておいた方がいいぞ」
虎の個性”軟体”その身体は靭やかに、そして薄く平らにも出来

る。
　そんな個性を使い、レディの胸の谷間からにゅるりと出てくる。
「な、な、なんて所から出てきてるんですか虎さん！」
「ぬうう、逃げられてしまったか。敵があの二人組だけではあるまい、早く皆を救い出せねば」
　逃げ出したであろう方向を睨みつけ、次なる行動を考える様に腕を組む虎、だが場所が悪い。
「ぬう、じゃないですよ！早くどいて下さいって！セクハラですよ！」
「二人とも何してんのよ…」
　茂みへと飛ばされたマンダレイが身体に小枝やらが引っかかったまま戻ってくる。
「虎はピクシーボブを連れて一度マタタビに戻って、それとＭｔ．レディ貴方の力が借りたい…肩に乗せてもらえるかしら」

◇◇◇

「お茶子ちゃん腕大丈夫？」
　茂みからの奇襲を受け、左腕を切られてしまった麗日お茶子を庇う様に前に出る蛙吹梅雨。
「ん！ん！…浅い少ない！」
　切りつけてきたナイフを眺め、何やらよく分からない言動をする―敵。
「急に切りかかって来るなんて酷いじゃない、何なのあなた」
「トガです！二人ともカァイイねぇ！麗日さんと蛙吹さん」
　意外にも素直に名を名乗り、そして名字を言い当てられ動揺する二人。
　情報が割られているこの状況は不利だと刹那に判断する。
「それとお茶子お姉ちゃん！王子くんがあなたの事欲しいって言ってました、でも今回は一位の人が狙いなので諦めてがっかりしてました。一緒に敵連合に来ませんか？」

お茶子はその言葉に以前モールで出会った男の子の事を思い出す。
人懐っこくて、笑顔が可愛くて、自分の事を心配してくれた…テロリストの少年を。
あの後、警察の事情聴取で判明した事だが保須市に現れた個性犯と同一人物であり、その経緯を聞き—戦慄した。
彼の個性…仮名”塊”
根津校長曰く。その個性を放置すれば全てを巻き込み、世界すら滅ぼしかねないと言う。
その類稀なる個性が敵の手にあり、そして行使された。
車両３５台、信号機等の公共物７基を巻き込み転がり、エンデヴァーによって食い止められたが——死者１８名、重軽傷を含めると被害は６０余名に及ぶ。
そんな事件を起こしておきながら、あの時の彼は笑顔を向けてきた。
目の前の彼女もマスクで口元を隠しているものの、王子同様に笑顔なのだろう。
「それとも私が貴女になれば王子くんは満足してくれるかな？」
肩の機械の一部を取り外し、襲いかかってくる。
「お茶子ちゃん」
個性”蛙”の梅雨が長く強靭な舌で負傷したお茶子を投げ飛ばす。
「施設へ走って。戦闘許可は倒せじゃなくて身を守れって事よ、相澤先生はそういう人よ」
「梅雨ちゃんも！」
「もちろん私も…つっ！」
屈んで反動をつけ跳ぼうした矢先、お茶子を投げる為に伸ばした舌を切りつけられる。
「梅雨ちゃん…梅雨ちゃん梅雨ちゃんっ！カァイイ呼び方です、私もそう呼ぶね」
「やめて、そう呼んで欲しいのはお友達になりたい人だけなの」
跳躍し草むらへと飛び込むがトガが持つ装置を投擲され、木に髪が

縫い留められてしまう。
「やーじゃあ私もお友達ね！やったあ！」
縫い止めた梅雨へと駆け寄り急接近する。
「血ィ出てるねお友達の梅雨ちゃん！カァイイねぇ血って私大好きだよ」
「梅雨ちゃんから離れて！」
拘束してるトガへと飛びかかり、反撃されるも身につけた格闘術で返り討ちにする。
「梅雨ちゃんベロで手！拘束！出来る!?痛い!?」
「凄いわお茶子ちゃん…ベロは少し待って」
舌を器用に使い、トガが放った装置を取り外そうとしている。
その間、力で取り押さえようとして―
「お茶子ちゃん…貴女も素敵、私と同じ匂いがする。好きな人が居ますよね」
地面に抑え込まれた時にマスクが外れ、こちらを横目に見てくる。
「そしてその人みたくなりたいって思ってますよね、わかるんです乙女だもん」
（何言ってるの……この人…）
誰も知らない筈の心情をさも当然の様に語りだす敵、余りにも突拍子もない発言に心が騒ぐ。
「好きな人と同じになりたいよね当然だよね同じもの身につけちゃったりするよね、でもだんだん満足出来なくなっちゃうよねその人そのものになりたくなっちゃうよねしょうがないよね貴女の好みはどんな人？王子くんはお茶子ちゃんの事好きみたいだよ？私は血の香りがする人が好きです」
恍惚とした表情で一気に語りだすトガ、友達との語らいに嬉しさが溢れんばかりだ。
「だから最後はいつも切り刻むの、ねえお茶子ちゃん楽しいねえ！恋バナ楽しいねえ！」
発言に気を取られ、注射器の様な装置を太ももに刺されてしまう。
「お茶子ちゃん!?」

未だ拘束が解けない梅雨がお茶子の心配をする。
その時、近くの藪から幾人のクラスメイトが姿を表す。
「麗日!?」
「障子ちゃん!皆…!」
その声に反応してしてしまったお茶子がトガへの抑え込みが緩んでしまい逃げ出される。
「人が増えたので殺されるのは嫌だからバイバイ!」
去り際に振り返り、お茶子へと話しかける。
「そうそうお茶子ちゃん、王子くんも来てますので会ってあげてください」
あの子も来ている。
いつ?何処から?もっと情報が欲しい、その為にも逃す訳には—
「危ないわどんな個性持ってるかも分からないわ!」
駆け出そうとするお茶子を拘束が解けた梅雨が制止する。

「何だ今の女…」
轟焦凍が逃げ去った女への率直な感想を零す。
「敵よクレイジーよ」
「麗日、蛙吹、怪我をしてる様だが立ち止まってる場合ではない。爆豪を護衛しつつ施設へと向かうぞ」
障子目蔵が二人を気遣うつつも前進を促す。
「…ん?」
「爆豪ちゃんを護衛?」
やってきた三人…障子、轟、そしてB組の円場の姿しかない。
「その爆豪ちゃんはどこにいるの?」
来た道を振り返る。
この非常時に油断する人間なんている筈がなかった。
それでも爆豪と常闇の姿は—ない。

「俺のマジックで貰っちゃったよ、こいつ等はヒーロー側に居るべき

じゃない…もっと輝ける舞台へ俺達が連れて行くよ」
樹上から男の声が聞こえる。
その声が聞こえるまで姿はおろか気配さえ感じさせずに…
「何者だ貴様！」
障子が円場を背負い直し、男へと向き直す。
「通りすがりのエンターテイナーさ、頭に元が付くけどな」
羽飾りの付いたシルクハットに顔を隠す為の仮面だけでなく、頭部をすっぽり覆うフェイスマスクまで身につける念の入れよう。
ロングコートにステッキを持つといった一昔前のマジシャン、といった風体であった。
「どけ！」
轟が障子へ忠告しつつ極大の氷をぶつける。
「おぉっと！悪いね、俺ァ逃げ足と欺く事だけが取り柄でよ」
軽口を叩きながらもアクロバットな跳躍で難なく氷を捌く。
「開闢行動隊！目標回収達成だ！短い間だったがこれにて幕引き！予定通りにこの通信後五分以内に回収地点へ向かえ！」
そう宣言した男は木々を滑る様に飛び移り、逃走を図る。
「させねえ！絶対に逃がすな!!」
轟が吠える。
あらん限りの力を使って更に氷を生み出し、身体に霜がつき始めているがお構いなしだ。
「君たちヒーローは諦めるという事を知らない、候補生すらね…だからグランドフィナーレを用意してあるんだ」
自称エンターテイナーが氷を回避しながら空中で器用にお辞儀をする。
「お待たせラストダンサー！一人きりのカーテンコールだけど見事に勤め上げてくれよ！」

◇◇◇

「そろそろ通報のあった地点だ、夜間の為に地表と黒煙の視認性が悪

い。煙に巻かれて山に激突なんてしたら暫くはヒーローの代わりに俺達がニュースのトップになるな」
　空中消火が主となるスーパータンカー仕様Ｃ１３０の機長がスクランブル発進のせいか緊張している副操縦士に発破をかける。
「やめて下さいよ縁起でもない。そうならない為に嫌って程訓練したんですから…」
　少しナイーブになっていたが、くだらない冗談を愚痴で返すぐらいには立ち直った様だ。と機長が軽く笑む。
「前方一時方向、山向こうに黒煙発見…進入方向を間違えたな、次回は迂回出来るルートへフライトプラン変更を―」
　機長が管制塔へと連絡を入れ次回からのルートを打診してるその時。
　山が動き出した。
「機長!?前方のや、山が！山が！」
「ＶＲ！操縦桿を引け！」
　消火剤をつめた機体は重く、思うように上昇はしないものの動き出した何かとの接触は避けられた。
「なんですかあれは!?」
「…通報には敵が起こした火災だという事だ、もしかしたらあの山は敵の個性かも知れないな」
　副操縦士が慌てふためいているが、冷静に眼下を睨む機長。
「まずいな、あんなのが居るんじゃ消火活動なんて出来やしないぞ…頼むぜヒーローさんよ」

「あー…飛行機行っちゃう飛行機」
　山と呼ばれたそれは、その殆どが原生林で構成された球体―王子の個性だった。
「やっとコンプレスさんから連絡来たけど、もう眠いよねー…」

誰が聞くでもない愚痴を一人零しながらのんびりと転がす。
開けた所にある施設、マタタビ荘に向かえと言われたがそこに行くまでずっと木しかない景色に飽きてきている。
大きな欠伸をしながら、やっと山を超えて施設が見える位置へと辿り着いた。
火災だったり割れた崖だったりと敵連合が好き勝手に暴れたであろう痕跡が目立つ。
「なんでみんなと来たのに一緒に居られないんだろ、コピーだからって扱いがぞんざいなんじゃないのー」
寂しさや疎外感を感じつつ目標へと転がす。
モチベーションが上がらないのか、はたまた眠いだけか、その速度は非常にゆっくりとしている。
「僕は今頃先生の所か。いいなー新しい脳無、荼毘みたいに専用の子貰えたりしてるのかなー」
自分で自分を羨んでいると、急に脳内に誰かからの声が聞こえる…とても不思議な感覚に目が冴える。
『敵連合のプリンスくんね？君に興味があるの、よかったらお話しない？』
「誰？まあ暇だったしお話してもいいよー」
『それとごめんなさいね。この声は一方通行だから返事されても返せないの、だから今から言う場所へと来て欲しいな』
一方的にまくし立ててくる声に眠気はなくなったものの、面倒くささを感じ目標へと速度を上げる。
「終わったらそっちに行くよーって聞こえてないんだっけ？」
急に速度を上げた為か謎の声が慌てた様子で語りかけてくる。
『ちょ！ちょっと待って！麗日お茶子！お茶子ちゃんが居るよ！』
足を止め、聞こえる声に耳をそばだてる。
「お茶子お姉ちゃん!?やった！お姉ちゃんの個性使って…木ばっかりだなー木製だけに木星とかになるのかなアハハ」
お姉ちゃんが居るのならばあの時の約束を果たして貰おうと思ったものの…この塊はつまらない。

どうしようか逡巡し、それでもやって貰おう。そう決めて声が言っていた場所へと向かう。

◇◇◇

時は少し遡り、シルクハットの男を追う場面。

追いかける生徒達を見つけたＭｔ．レディとマンダレイ―その時、背後から大きな地響きが聞こえる。

「な、何よあれ…私よりデカいのが動いてる…」

振り返り、自分より高い遮蔽物が無い為に全体像が見えてしまった。

山の向こうから非常にゆっくりとした速度で施設を踏み潰さんと迫りくる球体。

今から急げば施設が潰される前には辿り着けるだろうが―足元を確認する余裕はない。

施設付近はまだ見つかっていない生徒がいるかも知れない、そんな中走って潰すような事があってはならない。

「Ｍｔ．レディ！マンダレイ！あの個性の持ち主を知っています！」

足元にいつの間にか居た生徒、麗日お茶子が届くように大きな声で呼びかける。

「知ってるってどーゆー事!?私よりデカい個性なんて見た事もないわよ！」

縮小しお茶子へと詰め寄るレディとマンダレイだが、さらなる報告に頭を悩ます。

「常闇と爆豪が拐われました…っ！」

「くそっ…俺が居ながら」

障子と轟が絞り出す様な声で現状を報告する。

（どうする!?どっちを優先し対処すべきか…っ！）

マンダレイが悩んでるとお茶子が皆に提案してくる。

「っ！私とマンダレイさんならあの球体を足止め出来ます！皆は誘拐犯を追って下さい！」

「迷ってる場合じゃない…あんたらの担任なら合理的じゃないって言うでしょうね、行くわよ三人とも！」
　両手に轟と障子、そして肩に蛙吹を乗せたＭｔ．レディが誘拐犯へと走り出す。
「サッと行ってサクッと奪い返して！そんであのデカいのをぶっ飛ばして…あんの鼠の校長ここまで見通して私に打診したの!?絶対に報酬上乗せしてやる！」
　怒りとも恨みとも取れる言葉を遺して走り去るレディを見送る二人。
「さあやるわよ！あんだけ啖呵切ったんだから期待してるわよ」

　迫りくる球体。
　森を不自然に固めたそれは、もう大きさを推しか計ることが出来ない。
「そ、その威勢よく言ったはいいものの…近づいて来るのを見るととんでもない迫力で…ははは」
　お茶子が震える声で返事をする。
　施設から逸れ、狙い通りに誘導出来たが…対面するとあまりの大きさに現実感が無くなる。
「円場くんは置いてきてあげれば良かったかな、この状況なら地面で寝かせても文句言わなかったでしょうし」
　静かな寝息を立てる円場を背負いながら、しまった…と顔を顰めるマンダレイ。
「これからどうするの？私達でどうこう出来る相手じゃないわよ」
「…お話して時間稼ぎです、Ｍｔ．レディが来るまで」
「まあそうなるわよね、でも聞く耳を持たずにこっちに来られたらど

うするの？」
　引きつった笑いではあるがお茶子がマンダレイに微笑む。
「そこは大丈夫です…彼、プリンスくんはとても敵とは思えない子ですから」
　ついに球体が目前へと辿り着く。
　その大きさで月明かりが遮られ、辺り一帯に丸い影を落とす。
「お茶子お姉ちゃん！久しぶりだね！そっちのお姉ちゃんは…わかった！ワイプシのマンダレイだ！」
　そんな暗い場所に似つかわしくない陽気な声が降ってくる。
　球体の上から少年が落下してくる、あの高さなら普通無事では済まないのだろうが…衝撃も何もなくスーパーヒーロー着地を披露する。
「じゃーん！どう？かっこいいでしょー！僕だけ塊に乗ったり降りたり出来るんだ！」
　これだけ近いと上を見ても天辺まで見る事は出来ない、それだけの高さを飛ぶ事が出来る…彼の個性がそうさせるのか？
　それにしても凄い格好だ、横に伸びた頭や四角い顔…二つの意味で面食らう。
「っ！だいぶ規格外の子供みたいね…雄英を襲ったとかいう脳無って奴かしら」
「分かりません、でも脳無だとするのなら…いくつか説明出来ない部分もあります」
　こそこそと話し合う二人に警戒心も無く話しかけてくる。
「何の話してるの？そいやさっきの声ってマンダレイでしょ！確か個性テレパスだったよね！テレパスしてみて！」
　そう言いながら耳を塞いでワクワクした顔でマンダレイを見ている。
『…この距離ならテレパスじゃなくてもいいじゃない、普通にお話しましょ』
「凄い！頭の中に聞こえる！耳塞いでも聞こえるんだ！」
　満面の笑みを浮かべてはテレパスは他にどんな事は出来るの？と聞いてくる。

「プリンスくん何だか凄い格好してるね、その服はどうしたのかな？」
お茶子が余りにも奇抜な服につっこみを入れたくて仕方なかった。
「これ？いいでしょー！先生が作ってくれたんだ！デザインは僕だよ！」
コスチュームに関わる事を延々と自慢を続けている間にマンダレイに耳打ちする。
「こんな感じで幼いと言いますか、敵としての意識と言うものを持ってないんですよ」
「…もしかして襲撃犯の事とかも喋ってくれるかも知れないわね」
子供を利用するのは気が引けるがそんな事を言ってる場合ではない、少しでも情報が手に入ればそれだけ対策も取りやすくなる。
「今日一緒に来た人達の事教えてくれるかな？」
マンダレイの目が鋭く輝く、猫の瞳が如く。
「そうそう一緒に来たんだけどさ！ずっと一人だったんだよ！酷いよねー！みんなは仲良く一緒に行動してるのに僕だけ遠くからスタートだよ？コードネームつけてもらったのは嬉しかったけどさー」
聞きたい事は一切話さずに取り留めのない話を続け、適当な相槌を打つも頬をひくつかせるマンダレイ。
『ほんとに子供なのねこの子…何で敵連合に居るのかしら。私が聞くよりお茶子ちゃんのが適任かも、聞いてみてくれない？』
テレパスでお茶子へと話しかける。
お茶子も聞いてみたいと思っていたのか視線を合わせ大きく頷く。
「そいやプリンスくんはなんで敵連合に居るの？…まず敵連合って分かる？」
言葉を選びながら尋ねる、もしかしたら騙されているだけかも―
「？なんでって家だからだよ？お出かけしたら敵連合（うち）に帰るなんて当たり前じゃない」
帰属意識がある…洗脳の類か、もしかしたらもっと幼い頃から教育されていたのか。
まだ止められるかも知れない！ヒーローが保護すれば彼を救えるのかも！

そう思いお茶子は王子へと更に追求する。
誰しも踏んではいけない地雷があるとも知れずに。
「じゃあ何でこんな事してるのか聞いていい？ほら、こんなに大きなの転がしたら危ないよ？」
その発言を境に王子の雰囲気が変わる。
「…お茶子お姉ちゃんも大人たちと同じ事言うんだ、もういいよお姉ちゃんの個性使ってよ」
その余りの変貌ぶりにマンダレイが円場を放り出し確保へと動くが、王子には届かない。
そのまま転がり出した塊に巻き込まれてしまう。
「マンダレイさん！」
咄嗟に声を掛けたがこのままでは次は自分の番―
急に腕を捕まれ地面へと引っ張り倒される。
何事か！と身構えるよりも早く、下に居た円場硬成が個性”空気凝固”を使う。
彼の個性は呼気を固定化し、見えない障壁を作り出すと言うもの。
強度に難があるが倒れている二人に張られた障壁の上を球体が転がってゆく。

「ゲホ…し、正直ダメかと思った…」。
「円場くん！意識戻ったんやね！」
「派手に地面に叩きつけられたな、身体中が痛ェ…だけどそのおかげで目が覚めたぜ」
目覚めてすぐに潰されそうになってるのは予想外過ぎるが、と呼吸を整えながら立ち上がる。
「麗日、何がどうなってるか説明が欲しいけどそんな余裕ねえな」
まだ意識が朦朧としているが何とか立ち上がり通り過ぎた塊を見ると球体が逆回転を始め戻ってくる。余りの大きさに横に避ける事も出来ない。
「また固めてみるけど…ダメでも俺を恨むなよ！」
大きく息を吸い―別の巨大な影が二人を覆う。

「キャニオンカノン！」
迫る球体へと巨大な人影が飛び掛かる。
その蹴りは崖を砕き、ビルをも両断するが…球体は壊れなかった。
弾ける様に塊が木々を巻き散らかし、少しだけ跳ねて後退する。
レディの方は無事では済まず、大きく吹っ飛ばされる。
「けろ！あれは…っ！」
レディの肩にくっついていた蛙吹が空中で翻弄されているマンダレイを見つけ、咄嗟に飛び降り舌を巻きつける。
しかし塊が通った後、そこは草木一本も生えてない状態でありこのままでは落下は免れない。
「梅雨ちゃん！こっち！」
お茶子の声に反応しマンダレイごと舌を伸ばし、浮いてきたお茶子の個性”無重力”で速度を落とし軟着陸出来た。
「助かったわ二人とも…お茶子ちゃん大丈夫？」
「く、訓練の成果が出て…オロロロロ」
感謝を述べるマンダレイだが、心配が上回るお茶子の容体。
乙女が見せるべきでは…男でも見せるべきではない物が口から止めどなく溢れる。
「蛙吹さんだけ来たの？他の皆は？…あの二人は？」
お茶子の背中をさすりながらマンダレイが尋ねる。
「レディが走っても私なら振り落とされないから一緒に来たの、他の皆は後から来るわ…常闇ちゃんと爆豪ちゃんは…」
あまり表情をださない蛙吹の顔が曇る。
「ごめんなさい、本当は私達プロヒーローがやらなきゃいけない事なのにね…」
もう一人のプロヒーローが今も塊へと吶喊している。
倒れては立ち上がりまた倒れては、と何度もそれを繰り返す。
白かったタイツは全身が汚れ、打ち付けたのか鼻血を出してはいるものの闘志は失っていない。
「どうした！掛かってきなさいよ！」

声は勇ましいが既に足にきている様でファイティングポーズのまま動けていない。
だが彼女の奮闘により塊は今やＭｔ．レディと同じ上背となり、周囲には固められていた木々が散乱している。
レディが動けないと分かるとその塊も停止し、天辺に王子が現れる。
「マウントレディ！僕大ファンなんだ！だから君が欲しいな！君が居ればもっと素敵なものになると思うんだ！」
突然に敵からの告白に呆気にとられるヒーロー達。
「いくら私が人気があって美人でも子供に手を出したら犯罪になんのよ！」
鼻血を拭いながらドヤ顔でＭｔ．レディが答える。
（そこまでは言ってない気がする！）
心の中でお茶子がツッコミを入れていたら巨大な塊がいまさら重力を思い出したかの様に崩れ始める。
「ハァハァ…デカいだけあって移動が早すぎる、よく時間を稼いでくれたレディ」
「イレイザーヘッド先生！」
全速力で走ってきたようで肩で息をしながらも個性を発動し髪が逆立っている。
「目立つ格好で天辺に居てくれたのは僥倖だな、付近に居る者は離れろ！崩れるぞ！」
個性”抹消”彼の視線に射抜かれた者の個性を止める。但し発動型や変形型に限る。
その言葉がきっかけになったのか木々が雪崩となって周囲へと襲いかかる。
たまったものじゃないのは天辺に居た王子だ。
何故か個性が解け、不安定となった塊の上で何とかバランスを取ろうとするがどうにかなるものではない。
「えー!?何でボール無くなっちゃったの!?あー…落ちるかなこれは」
諦めにも近い感情でマスクの表情も穏やかになる。

自由落下に身を任せて、短い走馬灯が脳裏をよぎった時―巨大な掌が彼を救い出す。
「何諦めてんのよ!・こんだけ暴れておいてお仕置き無しとか許さないからね!」
Ｍｔ．レディが怒りの形相で転がってくる木々を掻き分け、怪我を押してでも王子を助ける。
大きな手で包まれる―その感覚にとても懐かしい気持ちが溢れてくる。
（いつかどこかでこんな事があったような…よく覚えていない…ううん、もしかしたらこれが初めてなのかも知れない）
非常時だと言うのに王子は安らぎを覚えてしまう、優しくも厳しい誰かを思い出して。
「…ママ?」
「誰がママよ!・まだ結婚もしてないってのに」
先程の告白と言い、突拍子もない発言ばかり言い出す敵に思わず後ずさってしまい―足元に転がっていた木を踏んで後ろへ転んでしまう。
掴んだ腕を胸元に引き寄せ何とか衝撃を与えない様にしようとするも、コピーの王子にはそれだけで致命傷だった。
地響きをあげて倒れる、慌てて手元を見るが謎のドロッとした液体だけが残されていた。
「キャー!・つ、潰しちゃった!?そんなに強く握ってないわよ!?」
「よく見ろ本物なら赤い血液の筈だろ、それに原型が無くとも身体は残されてる…くそっ厄介な個性だ」
慌てふためくＭｔ．レディを宥める様に説明をするイレイザーヘッド。
「レディは例の塊に巻き込まれた人が居ないか木の片付けを頼む。生徒達は密集して施設へと向かう、警戒を怠るなよ」
その場に居る全員へそう伝え、周辺の被害を見る。
施設からここまでの原生林は見る影もなく地表が現れており、一部は火災で焼け落ちている。

遠くから幾多の緊急車両がサイレンを鳴らして近づいてきているのが聞こえ、空では既に飛行機隊が空中消火を試みている。

夜明けはまだ遠い―

Ｎｏ．８

都内にある神野区の寂れた裏通り。
空きビルが連なり街の中心部から然程離れておらず、人通りは疎らである。
夜ともなると街灯の灯りしかなく、聞こえる繁華街の喧騒も何処か遠くの出来事のようだ。
打ち捨てられ、手入れもされてない為に草むした廃倉庫…そこは脳無格納庫と化していた。
その最奥に諸悪の根源、最古最悪の敵―ＡＦＯが幾つもの管を身体から生やし、鎮座している。
「先生、王子を連れて参りました」
乱雑に積まれた荷物を避ける様に黒い霧が室内に発生する。
暗く、広くはないその室内に場違いな明るい声が響く。
「せんせー！こうして顔合わせるの久しぶりだね！怪我の具合どう？からだ大丈夫？」
全身をライトグリーンのコスチュームで固め、赤いスカーフをつけた王子が霧からぴょこんと現れる。
「ははは！僕に顔は無いよ王子、身体の調子は一進一退って所さ」
大きめのリクライニングチェアが回転し、ＡＦＯが王子へと振り向く…その顔は瞳も鼻も耳さえも無く、大きく開かれた口だけであった。
「おや？その首のスカーフはコスチュームにはなかったよね？」
「来る前に僕と僕（コピー）を見分ける為につけたのさ！アイデンティティだね！」
最近トゥワイスから覚えた英語をドヤ顔で言い、見せびらかす様にスカーフをはためかせる。
「この場合インディヴィジュアリティの方が正しいと思いますよ王子、それでは先生行ってまいります」
「ああ…開闢行動隊の成果、楽しみにしているよ」
ＡＦＯと挨拶を終え、そのまま姿を消す黒霧に何か言いたそうな顔

をした…何かを言い出す王子。
「んもー！じゃあそのインディ？って方でいいよ！黒霧さんのいじわる！」
消えた黒霧にむかって舌を出して…すぐに引っ込める。何か思う所があったようだ。
「急に呼び出してすまないね、楽しみにしていた林間学校だと言うのに」
「確かにあっちの僕が羨ましいけど…先生が僕にお願いなんて初めてじゃない？いつもお願い聞いてもらってるし、今度がこっちの番だよね」
少し悩んだ素振りであったが笑顔を向ける、その笑顔が頼もしくも恐ろしいものだとＡＦＯは思う。
（君に掛かれば僕も固められてしまうんだろうね…僕にも好意を向けてくれるなんてね）
マスク越しではあるが頭を撫でると笑顔が更に溶ける、四角い顔ではもう描写出来ないようだ。
「わざわざ来て貰ったのは君の個性の事でね…おいで脳無」
その声に応じて暗がりから巨大で猟犬の様なシルエットが姿を表す。
その身体は黒、そして体毛はなく大きな顎には口枷がついており…背中から大きな腕が何本も生えていた。
「わぁー！ワンちゃんみたいな脳無だね！なになに!?ネホヒャンみたいに僕専用の脳無!?」
やってきた脳無へと駆け寄ると尻尾を振り回し、口からは涎が止めどなく垂れ流れる。
「君にあげたい所だけどまだ試作段階なんだよ…他の脳無の様に様々な個性を組み合わせたんだけど”王子の個性”だけがどうにも発揮してくれなくてね？その為に色々と工夫して身体とか作ったんだけど、これじゃどうにもならないと思って君を呼んだのさ」
ＡＦＯは自分でも試しにボールを出現させようとしたが…出来なかった。

個性の全体像は掴んではいるし出来る事もやれる事も分かっているが、核（ボール）を出現させる事は叶わずに終わった。
（発動にも条件あるとはね、実に複雑でユニークな個性だよ）
「僕の個性も持ってるの!?凄いや先生！ワンちゃんと一緒に散歩に行きたいなあ！」
流石は個性の大先生！とばかりに尊敬の眼差しを向ける。
「そこでだ王子…君が先生となって脳無に個性の使い方を教えてあげてくれないかな？」
そう言われて顔が輝き出す…比喩ではなく本当に発光し始める、マスクの顔表示システムの賜物である。
「僕が先生…！頑張るよ！って言ってもそんなにやる事ないと思うんだけどね」
伏せている犬脳無の背中を撫でながらのんびりと答える、生えていた腕は引っ込められた様だ。

「ボールを出す時はね、思いをありったけを出すんだ！大事なのは気持ちだよ！」
根性論とも感情論ともとれる言葉を握りこぶしと共に語りかける。
一切説明になっていない発言ではあるが、王子の言葉に反応し尻尾を千切れんばかりに振り回し…大きな球体が目の前に現れた。
その球体は王子の身長より高く、表面は凹凸がなく滑らかで赤と白のマーブル模様だった。
「よーしよし！簡単に出来たじゃないか！流石は僕の生徒だね！」
犬脳無へと抱きつき頭も背中も撫でまわす。
もっと撫でて欲しいのかお腹を見せてきて、それに答えるように更に撫で回す王子。
喜びを分かち合う一人と一匹を眺めながらＡＦＯは静かに背凭れに身体を預ける。
（気持ちか…彼の個性からして気持ちの具現化と言っても過言でない、忘れていた訳じゃないけど…今の僕には分かっていても使えそうにないな）

長年ＯＦＡ（ワンフォーオール）と戦い続け…オールマイトとの死闘を経て、表舞台から去った自分はもう枯れてしまっているんだなと自嘲を込めて一息つく。
「にしても大きなボールだねー…僕のより大きいや」
撫でるのが一区切り付いたのか、改めて自分の個性を見ている様だ。
「…もしかして王子、君もこれぐらいは出せるんじゃないのかい？」
少し前から黒霧が言っていた、王子の立ち上がりの遅さについての提言。
対処療法としてドクターが提案した風船製造マシーンで幾つも風船を作り、最初期の核へと纏わせると言った方法が取られていた。
今回の林間学校でもコピーの王子に持たせている筈だが…
「ほんとだ、大きいのだせるね！知らなかったなー」
ちょっとした気づきでその問題も解決された。
「先生と生徒と言うのは一方的に教えるだけではなく、互いに学び、薫陶を受けるものさ」
さっきの僕みたいにね、と心の中で付け加える。
「まだまだやる事は多い、少しばかり手伝って貰うよ王子」

◇◇◇

「っ!?ここは何処だ…この光は…個性の対策はされていると言う事か」
投光器がいくつも設置され、その中央に居る人物へと煌々と照らしている。
意識を取り戻した少年―常闇踏陰。
開闢行動隊が一人、シルクハットのエンターテイナーＭｒ．コンプレスが彼の強さを見初め、独断で拉致したのだ。
その強さたるやムーンフィッシュを意に介さず一蹴し、森の一部をその豪腕で削り取った。
彼の個性”黒影（ダークシャドウ）”

自身の影が実体化し、意思持って自由自在に動く—そう、この個性には意思がある。
暗闇であればある程にその影の力は歯止めがかかる事なく強化される。
逆に言えばその個性の性質上、光に滅法弱く無力化は安易だった。
「これがコンプレスが言っていた子か、見た目も異形化の個性ならば二重個性の持ち主と言う事になるね」
投光器の向こうから近寄ってくる声が聞こえるが眩しくて姿は視認出来ない。
「…何者だ」
「僕はＡＦＯ、君たち若者には知名度が低いかな？」
「敵連合の手の者か…っ！」
目を細めるもその姿はやはり見えない。
「まあそんな所だよ。実を言うと君はイレギュラーでね？処遇をどうしようか考え、僕にお鉢が回ってきたんだ」
常闇が意識を失う前の事を思い出す、テレパスで言われてたのは爆豪が狙いだと。
「爆豪はどうした？殿を務めていた俺を拉致しても仕方あるまい」
「勿論爆豪君にも来てもらっているよ、僕の所じゃなくて他で説得中さ」
「説得？…口説き落として敵にでも寝返らせようとでも言うのか」
そう言葉にし、一笑に付す。
「貴様らはあの男の事を理解していない、確かに粗野で粗暴な振る舞いをするが…その心には正義を宿している」
説得しているのならば無事であろう…クラスメイトの安否を知り、次はこの状況を脱する方法を模索する。
「そうかも知れないね。だけど考え、実行し、それで失敗したとしても次を考える。そのプロセスが大事なんだ」
失敗すら織り込み済みとでも言うのか、気軽く話しかけてくる。
「少々お喋りが過ぎたね、最近よくお喋りする子と一緒に居たから僕までそうなってしまったかな」

一歩、また一歩と近づいて来ている様だ。
「それじゃあ僕の用事も片付けてしまおうか」
投光器を避けて迫りくる、常闇に男の影が落ち―
「黒影（ダークシャドウ）！」
個性を発動した筈だが…彼（ダークシャドウ）の返事はない。
「ふむ？ダークシャドウ？…なるほど、この個性には意思があるのか。複雑な個性、そしてその異形化の個性と言い…個性特異点は遠くないようだね」
「何を言っている!?貴様っ！俺に何をした!?」
個性が使えなくなり、眼の前に居る仮面の男が自身の個性を言い当てる。
考えたくもないが―いや、そんな事が出来ると言うのか。
照らされ続けたせいか、脳裏を過ぎった予感からか全身から汗が吹き出る。
そして告げられる、考えうる最悪の―
「すまないね、君の個性は貰ったよ…ああ異形化（そっち）はいらないや」
常闇に背を向けて立ち去る、残った本人には興味もないと言わんばかりだ。
「ナンダ!?誰ダ!?フミカゲハドウシタ!?」
「始めまして黒影くん、君に提案があるんだけど聞いてくれるかな？」
ＡＦＯを名乗った男は自分の個性を使い、現れた黒影と話始める…自我はそのままの様だが自由には動けない様だ。
「待てっ！黒影を返せ！黒影！」
「フミカゲ！ナンデ俺達ガ離レテルンダ!?フミカゲ！」
「何も今生の別れと言う訳じゃない、近いうちにまた出会えるさ…僕との出会いは君の福音となる筈だよ」
黒影に言い含めながら歩き去る…少しだけ常闇の方を見やり―
「もう光はいらないね…消しておくよ。久しぶりに一人になれるんだ、寛いでいるといいよ」
消灯され、男の気配も消えた。

一人残された常闇、廃倉庫に静寂が訪れる。
幼い頃から共にしていた黒影の気配が無くなり呆然とする。
「俺は…俺はどうすれば…」

◇◇◇

「…良い判断だよ死柄木弔」
モニターの向こうでは敵連合を前にして爆豪が啖呵を切っていた。
「やっぱりダメかー、フミカゲの言ってたとおりだね」
ＡＦＯの座っているチェアの背凭れから顔出してモニターを見ていた王子が画面の向こうに居る皆に話しかけた。
しかしその言葉に反応したのは弔達ではなく、爆豪だった。
「もう一人は知らねェが…その声聞き覚えがあるぞ、ＵＳＪン時のクソ球転がしてたガキだな？鳥頭をどうした!?」
「鳥さんなら寝てるよ？先生が念の為に残しておこうって」
一緒に捕まっていたが姿が見えなくなったクラスメイトの所在を聞きだそうとしたが間に立っている弔がそれを許さない。
「黒霧、コンプレスまた眠らせてしまっておけ」
「ここまで人の話聞か―」
突然モニターの電源が落ち、大きな破砕音が聞こえる。
「あれ？停電？もっと見てたかったなー…先生知ってる？体育祭のカツキって凄かったんだよ！」
ただでさえ暗い廃倉庫の中、モニターの明かりが消え光源がなくなったというのに意に介さずお喋りは止まらない。
「どうやら来客の様だ。それも大勢とは夜分に不躾だね…王子、着替えておいで」

「うええ～これが脳無、キモいけどさっさと拘束しないと…ちょっと移動式牢（メイデン）まだぁ!?」

「新人、そっちの瓦礫の下の脳無も頼む。移動式牢が来るまではこちらで拘束しよう」
倉庫の壁をぶち抜き、突入したヒーローＭｔ．レディとベストジーニストが周辺に散らばった脳無達を手早く拘束していく。
「ツクヨミよ！ラグドールよ！返事をするのだ!!」
「拐かされた生徒とチームメイトか！息はあるようだな…もう一人の生徒もここに居るかも知れん」
プッシーキャッツの虎とギャングオルカが行方不明になっていた人物を見つけはしたものの様子がおかしい。
「しかし様子が…！何をされたのだ、二人とも！」
一切の着衣はなく、意識がはっきりせず呼びかけにも答えない二人。
「すまない虎、前々から良い個性だと……丁度良いから…貰う事にしたんだ」
物陰から声が聞こえる。
明かりは点いておらず、街灯と月明かりだけでは倉庫を見通すには厳しい。
「常闇くんは僕の発案じゃないけど…彼も良いね、とても有意義な実験が出来たよ」
「止まれ、動くな…連合の者か」
ギャングオルカが前に躍り出て暗がりに居る人物へと警告する。
「こんな身体になってからストックも随分と減ってしまってね…」
警告されたがその人物は歩みを止めない、一歩また一歩と近づいて

―

着ていた背広が動き出し、締付け拘束される。
ベストジーニストの個性”ファイバーマスター”
繊維を操る個性で自分が着ている服も離れた相手の服ですら自由に操る。
「ジーニストさん！拘束します！」
Ｍｔ．レディが巨大な手を伸ばし、暗がりに潜む人物を掴もうとする。

「いいぞ新人、敵には何もさせるな」

その瞬間、荒れ狂う爆風によって廃倉庫の一角は消し飛んだ。
壁も床も地面さえ抉れ、連なるビルをも吹き飛ばした。
「せっかく弔が自身で考え、自身で導き始めたんだ。出来れば邪魔はよして欲しかったな」
圧倒的な破壊をもたらしたその人物、ＡＦＯが空中に制止しながら呟く。
「先生浮いてる！凄いや！空も飛べたんだね！」
着替えが終わった王子が壊れていない倉庫から顔を出して近づいてくる。
「そうだ王子、実験中の脳無を連れてきてくれないか？」
「はーい！」
その場に似つかわしくない明るく元気な返事が辺りに響く。
「さて…やるか」

◇◇◇

「あー！オールマイトだ！あれ？みんなも居る？いつの間に来たんだろ」
先生に言いつけられ、奥に居た二体の脳無を連れて戻ってみると倉庫は更に破壊され、見る影もない。
「黒霧さん寝ながら個性出してる！お行儀悪いんじゃないの―ん？」
のんびり観戦していたら視界の隅で動く人影を見つける。
「街の人かな？丁度いいや！ワンちゃんの初お披露目だ！」

「だめだぞ…緑谷くん…！」
「違うんだよ、あるんだよ！決して戦闘にはならない、僕らもこの場か

ら去れる！それでもかっちゃんを救け出せる方法が！」
　変装を施した5人。緑谷、轟、飯田、切島、八百万が顔を付き合わせ相談をしている。
　詳細を詰めているせいか、周囲への警戒が薄い…それが仇となった。
「誰かと思ったらA組の人だー！体育祭見てたよ、みんなトーナメント出てたよね！」
「―っ!?」
　急に大声が聞こえ、全員がそっちを見ると…何とも言えない服装の人物、王子がこちらを指差して立っていた。
「所でかっちゃんって誰？」
　首を傾げ尋ねてくるが轟が素早く、そして最小限に氷で王子を包み無力化する。
「ドクターの言ってた通りだ！全然冷たくないや！でも身動き取れないから意味ないじゃん！」
　氷漬けになっているにも関わらずその内側から声が聞こえる。
「な、何者ですの!?」
「そんな事はどうでもいい、見つかっちまったぞ！」
「っ！やるしかねェ！緑谷！飯田！」
　慌てる八百万と切島を横目に轟が叫ぶ、しかしその声に答えたのは二人ではなく―
「何ヲヤルツモリダカ知ラナイガ…見知ッタ顔ダカラトイッテ見逃ス訳ニハイカナイナ」
　一人の大柄な脳無が王子の後ろから姿を露わにする。
　その姿は今まで見てきた脳無とは違い、露出した脳も瞳もない黒一色で塗り固められていた。
「の、脳無…」
　八百万がその威圧感に気圧され、後ずさる。
「そ、その声はまさかそんな…黒影くん!?」
　緑谷が顔に絶望の色を浮かべながら叫ぶ、もし本当にこの声が黒影だとすると常闇は脳無へと改造されてしまったのではないかと。

「…彼奴(フミカゲ)トハ袂ヲ分カッタ、ココニ居ル俺ハ黒影ジャネェ、俺ノ名ハ―シュバルツ」
そう言い終わると拳を振り上げ―凍っている王子を殴った。
「いったいって！もっと優しく助ける方法あったんじゃないの!?」
氷の拘束から抜け出せたものの四角い顔を赤く表示させ、ぷりぷりと怒った顔になるが脳無―シュバルツは何処吹く風だ。
「知ランナ、助ケテモラッタダケ感謝スルンダナ」
文句を言う王子を一瞥しながら緑谷達へと迫る。
「そんな!?常闇くんはどうしたの!?君だって一緒になってヒーローを目指してたじゃないか！」
「相変ワラズ煩イ男ダ。ヒーローハフミカゲノ目標デアッテ俺ノデハナイ…俺ニハ夢サエ見ル事ヲ許サレナカッタ」
緑谷がまくし立てるがシュバルツは平然と言い放つ。
「最初ハ戸惑ッタガ、良イ物ダナ…自分ノ足デ立ツノハ」
穏やか声ではあるが向ける殺意は抑えきれていない、振り上げた拳が緑谷達を襲う。
「っ！あぶねぇ！」
咄嗟に切島が間に入り個性”硬化”を使い盾となるが、勢いまでは殺せずに壊れていた壁が更に壊れて―
「なっ!?赤髪!?デクもだと！」
「君たち…マジかよ！」
爆豪とオールマイトがその姿を見て、悲鳴にも似た声をあげる。
「……なんで雄英の生徒がここに？」
「そんな事言ってる場合じゃねえだろ！増援が来たって事だぞ！どうすんだ!?」
いきなりの事で呆ける弔にスピナーが指示を仰ぐ。
「王子も居るし新しい脳無も居る…問題ない、こっちのやる事は変わらない―爆豪だ」
冷静にその場を見極め、指示は変わらない事を全員に伝える。
「くっ！何で居るのか知らねェが囮になって死ね！クソナード！」

「わぁー！オールマイト！久しぶりだね！前はダメだったけど今度は持って帰りたいな！」
「もしかしてあの時の少年!?凄いコスだね、ヒーロー志望なら敵(そっち)に居るべきじゃないよ！」
　ボールを転がしながらオールマイトへと突進していく王子へと声をかける。
「ヒーローでもいいよ！みんな固めて仲良くお星さまにしたいだけだからね！」
　あの個性に巻き込まれたらマズい！そう判断したオールマイトはやむなくＡＦＯに背を向けて必殺技を放つ。
「ＮｅｗＨａｍｐｓｈｉｒｅＳｍａｓｈ！」
　拳で生み出した爆風で王子を、自分自身をも吹き飛ばしＡＦＯへと飛び掛かるが―
「なんだいそれは、無様な飛び方だね」
　空気の塊にその背中を撃ち抜かれ、地面へと落下する。
「先代の志村菜々は普通に飛んでいたのに、君は飛べないのかい？」
「穢れた口で…お師匠の名を出すな!!」
　怒りを露わにしながら立ち上がる。
　厳しい顔つきが更に険しくなっているのが手に取るように分かり、更に言葉を重ねる。
「理想ばかり追う身の程知らない哀れな女だった、実にみっともない死に様…どこから話そうか」
「―貴様っ！」
「待て！俊典！乗るんじゃねえ！」
　今にも飛びかからんばかりの形相になったオールマイトへと待ったを掛ける声がする。
　いつの間にか現れた空を飛ぶ老人、ヒーローグラントリノ。
　現れたと同時に敵連合の数名をノックダウンさせる程の腕前を持っていた。
「グラントリノ！」

「緑谷！てめぇ後でお説教だからな！分かってんのか！俊典もだぞ！」
「はいィ！すいません！」
「わ、私もですか？」
師弟揃って情けない声を出す。
「やれやれ痴話喧嘩は自宅でやって貰えないか？」
周りへと視線を移すと…立っているのは弔、トガ、シュバルツと遠くへと飛ばされた王子。
ヒーローは最初にやられたプロ４人以外全員まだ立っている。
「こちらが不利と言った所かな…シュバルツ、王子に伝言頼むよ」
「ケッ！ソーユー契約ダカラ従ッテヤルガ、何デ俺ガアンナガキヲ…」
「待ってよ！黒影くん！君は一体どうしちゃったんだ！」
「何だと？おいクソデク、あの黒いのは鳥頭の個性なのか？」
緑谷達全員を相手しても止める事が出来ず、ＡＦＯとの合流を許してしまった。
「う、うん。あの声は…あの巨大な腕での攻撃は黒影くんのものだった」
「ならあのクソ影は俺が相手をする！てめぇらは転がってるモブ敵でも捕まえておけ！」

「はー…オールマイトの拳ってあんな事出来たんだー！拳で天候変えるんだし当然かな！」
遠くへと転がされ地面で仰向けになりながらもオールマイトへの尊敬が止まらない。
「オールマイトと先生が一緒になったら素敵なのになー…こっそり後ろから固めちゃおうかな？」
むくりと起き上がりながらそんな事を呟いていたら目の前にシュバルツが立っていた。
「王子、伝言ダ…アノ犬ヲ出セトヨ」

「ワンちゃん?もう命令は出してるよ?そのうち戻ってく―」
王子の言葉が終わる前に強い爆風が二人を襲う。
「あん時は逃したがもう逃さねェぞクソ塊のガキがよ!」
凶悪な顔した爆豪が二人へと腕を突き出しなおも爆破を浴びせる。
その連続した爆破の中から巨大な手が伸びるがそれを回避する。
「爆豪…貴様ニハ借リガアッタナ!フミカゲハヤラレタガ今ノ俺ハ違ウ!」
「へっ、御主人様が変わって随分デカい口を叩く様になったじゃねーか!」
「違ウ!コノ身体コソガ俺ナノダ!手モ!足モ!全テガ自分ノ意思デ動カシテイル!」
黒い身体大きく膨れ上がる。
豪腕を振るい、叩きつけ、薙ぎ払うが―全て避けられてしまう。
「どうせその身体だって借りもんだろが!動きが単調で寝てても避けられるぜ!ほらほらどうした!あんよが上手なんだろ!?」
的確に回避し、爆破を繰り出してくるがダメージはない…閃光も効かない。
光を克服したシュバルツにとって爆豪の爆破も轟の炎も恐れる必要はなくなったが―
(何故ダ!?何故攻撃ガ当タラナイ!?)
焦りがさらなる焦りを呼び、攻撃が大振りになり余計当たらなくなっていくが気が付かない。
「バカが!今までは鳥頭が全て段取りを考えてくれていたから出来たんだよ!お前一人じゃ何も出来ないに決まってるだろ!さっさと土下座でもして鳥頭に帰んな!」
一際強い爆風がシュバルツを襲う、身体にも影にもダメージは無いが瓦礫にぶつかり動かなくなってしまう。
(ソウ―ナノカ?俺一人デハ何モ出来ナイノカ?…フミカゲ)
項垂れて指先一つ動かす事が出来ずにいるシュバルツを見て、王子が前に出る。
「イジメはダメだよ勝己、シュバルツはまだ赤ちゃんみたいなものな

んだから」
「何がイジメだ、鳥頭から家出したからぶん殴って矯正してるんだろが！」
　爆破し威嚇しながら王子へと迫る爆豪、腕を拡げてシュバルツを守ろうとする王子。
「あのクソ塊がなければクソガキ以下だ、どけ…いやどかなくていい…二人とも吹っ飛べや！」
　塊は近くにはない、オールマイトに飛ばされ遠くの瓦礫の山に埋もれているのを確認している。
　両腕を突き出し爆破する、そこには躊躇いも容赦もない。
　派手な爆発に王子とシュバルツも吹っ飛ぶが、その弾道がおかしい。
（真正面からぶっ放したのに何故右方向へ飛ぶ？…あの方向は―まさか！）
　急いで追撃に向かおうとするも、その予感は当たってしまった。
　あの塊は瓦礫の山に埋もれたんじゃない、瓦礫の山が塊になったのだ。
　動き出す瓦礫、周辺にあった残骸一切残らず塊と化す。
「クソガキって久しぶりに聞いた感じするなぁ…勝己も一緒に来ない？敵連合は楽しいよ？」
　瓦礫の上からこちらを見下ろして話しかけてくる。
「楽しいから俺に敵になれと？嫌だね。したくねーモンは嘘でもしねぇんだよ俺ァ、テメェはどうなんだ？俺を説得してるが本当にそれがしたい事か？」
　いつになく真剣な顔つきで王子を睨む爆豪。
　たった数秒だが二人の間に沈黙が流れ…王子が塊から降り、対峙する。
「ちゃんと相手と向き合ってお話する、だったかな。勝己が嫌なら…うちに来てくれなくてもいいや、そのかわり立派なヒーローになってね」
　笑顔で敵からヒーローになってくれと意味の分からないエールを

貰い、怒りより先に笑いがこみ上げてくる。
「ハハ！なに言ってるんだテメェは！じゃあクソガキを捕まえて立派なヒーローへの足掛かりにしてやるよ！」
「えー？捕まりたくはないから頑張って転が…っげぷぅ」
　王子のマスクやコスチュームの隙間から黒い液体が零れ落ち、身体を包んでいく。
（これはさっきの！逃げられる―いや、向かう先はっ！）

「王子、犬にはちゃんと命令を出したかい？それにしてもシュバルツがやられてしまってるとはね」
「ワンちゃんにはとってこいさせたよ…それにしてもこれ臭いね先生…」
　臭いでぐったりした王子と微動だにしないシュバルツが弔の横へ出現する。
「王子、それに何だこの脳無は…？」
　ＡＦＯの指先が倒れていたマグネに刺さり、個性を強制的に発動させる。
　トガを中心にその場に居る敵連合全員が引き寄せられる。
「え？　やーそんな急に来られてもぉ」
　次々と黒霧のワープゲートへと吸い込まれるが弔だけは抗おうとする。
「待て…ダメだ先生！その身体じゃあんた…ダメだ…！俺はまだ―」
「弔。君が皆を先導し、戦い続けろ」